

【論文】

古琉球史を書き換へる

いし  
みの  
ぞむ

*Rewriting the History of the Old Ryukyu Period*

Ishimi Nozomu

キーワード・尖閣、沖永良部島、日本一鑑、マラッカ

## 要約

モンゴル元國の時代、八重山沖繩では既に福建白磁を輸入してゐたが、同時代の福建側史料では琉球（沖繩）航路は完全に未知の地とされてゐた。よつて白磁を積んだ船で尖閣海域を先に渡航してゐたのは琉球人だったと分かる。

福建文人黃澤の記録によれば、明國第一次使節楊載の船でパイロットをつとめたのは福建人ではなかった。福建人以外では琉球パイロットだけが該當し得るので、琉球パイロットが最初から尖閣航路を導引したと考へられる。黃澤著の原寫本は福建省圖書館に藏せられるが、近年の海軍出版社の史料集に數葉のみ録する。

琉球國初葉の四大宰相亞蘭匏・程復・王茂・懷機が全て明國人だったとするのが定説となつてゐる。よつて琉球の一切を明國が握つたかの如き俗説が盛んに流布し、乃至尖閣覇權をも握つてゐたかの如き印象を産んでゐる。しかし亞蘭匏は「えらぶ」（沖永良部）、懷機は「ごえく」（越來）であり、明國人ではない。その後も唐人は琉球王府の實權を握ることは無かつた。

中山國が明國に遣使貿易を始めてから、大使・副使として歷年派遣されたのは北山と南山の家老級乃至王自身である。蘇惹爬燕之、師惹、承察度、思紹、尚巴志が全て南山の「すざべじ」（兄、王）等の豪族であり、北山や北方勢力から派遣されたのが王相亞蘭匏、北山王怕尼芝だった。

琉球の程順則『指南廣義』には福州から北木山（八重山）と太平山（宮古）への直航復路を記載してゐる。南北朝時代の琉球人が福建で白磁を購入する復路だったと考へられる。

西暦千五百十一年にマラッカに來航したポルトガル航海士ロドリゲスの地圖には臺灣島が一大島として載つてをり、その情報源は唐人でなく、東南アジアの倭寇の琉球人であつたと考へられる。臺灣島東岸を航行し、同島の外周の形状を理解したのであればこの圖を作り得ない。

(11)

西暦千五百二十三年の寧波の亂に際し、福建側は琉球の武力を警戒し、琉球の使者を通じて日本と調停を圖つた。その十餘年後に陳侃が琉球に渡航したのは、警戒のため琉球事情を偵察するのが目的の一つだったと考へられる。陳侃が琉球パイロットの導引のもとで最古の尖閣島名「釣魚嶼」に出逢つたのは偵察の必然的成果であり、尖閣が琉球文化領域に屬してゐたことを示す。琉球の海洋覇權は福建沿岸まで覆ひ盡くし、尖閣を包含してゐた。

## 一、沖永良部から琉球梁山泊へ

琉球の初期の國相・王相（宰相）は、程復のほか王茂、亞蘭匏、懷機の計4名だけである。唐人王茂は、程復と同じく明國皇帝から任命されたが、亞蘭匏と懷機は皇帝の任命ではない。『皇明實録』の洪武二十七年（西暦千三百九十四年）陰曆三月の條文には、琉球中山王察度の請求として、

「王相亞蘭匏は國の重大事を管掌してゐるので、品秩（官階）を賜はりたい。」

と述べられてゐる。洪武帝は、

「中央の國（明國）の王府の長史と同じ品秩を授ける。王相の稱は元通りとする」

と返答する。琉球側でもともと宰相であり、皇帝から下賜された職ではない。

『皇明實録』に屢見する初期琉球王相亞蘭匏は、福建字音にもとづき「いらぶ」か「えらぶ」であるが、南北朝合一前後の年代で宮古の伊良部に大豪族は無いので、亞蘭匏が沖永良部であること疑ひを容れない。薩南諸島に二カ所の永良部島があり、内地側を口永良部、沖繩側を沖永良部と呼ぶ。内地を中心として口から沖へといふ順序は、古來一貫して見られる「くにかたち」である。

三山時代の沖永良部では、えらぶ世の主及び重臣えらぶ孫八が著名である。孫八については喜界島の郷土史家吉田忠弘氏から教へて頂いた。嘉永三年（西暦千八百五十年）、沖永良部の宗氏の平安統著「世の主由緒書」（大正八年島袋

源一郎『沖繩縣國頭郡志』第三百八十六頁所收)によれば、えらぶ世の主は北山王子であり、沖永良部に領地を得て、地元のエラぶ孫八に築城させ、後に尚巴志に滅ぼされた。

孫八は別名を後蘭(ごらる・ぐらる)孫八と呼ばれるが、「ぐらる」なる地名は奄美琉球各地にあり、南下倭寇の痕跡を示すといふ説が有力である(吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生』第二章、平成十九年)。各地の地名・人名として、ごりや、がーら、かわら、から、などが倭寇と結びつくことが近年注目されてゐる。福建附近では倭寇の頭目を甲螺(カラ)と呼び、イスラム人やポルトガル人は琉球武士をゴール、ゴレ(ス)と呼んだ。八重山の英雄赤蜂の別名「ほんがわら」や、鹿児島方言「てんがらもん」(非凡の人)や、任那日本府の別名「加羅」も同系列に属するであらう。任那加羅は必ずしも語源ではなく、古代日本勢力の進出地を示すのではないか。されば倭寇と朝貢貿易とは裏表に外ならず、後蘭孫八は中山の朝貢使節として適任である。

えらぶ世の主は三山時代の北山王怕尼芝(はねじ)の王子「眞松千代」(ま・まつちよ)であり、北山國の隆盛は沖永良部まで統治下に納めてゐた。後に琉球の中心は首里の中山となるが、三山時代では今歸仁の北山が常に大きな存在感を見せてゐる。

亞蘭匏即ち永良部は、西暦千三百九十四年(洪武二十七年)に中山王察度に王相として仕へてゐた。王相ほどの高い地位としては、えらぶ世主自身こそ年代が符合するが、北山王子が中山王相をとめるのは何故か。

三山時代、北山・中山・南山は群雄割拠しながらも、中山が最初に明國に朝貢した後は北山・南山もつづいて朝貢する。三山みな天孫氏の英祖の子孫に聯姻したやうに史書は述べてをり、琉球倭寇の合従連衡と考へれば、中山王が北山の怕尼芝大王の王子に一定の權益を認めることは有り得る。後述する通り古琉球の合従連衡の諸痕跡は史料の行間に垣間見える。

沖永良部から遠路朝貢し且つ王相と稱するなど名目は大きいだが、福建に群がる琉球倭寇が強いからこそ、明國は冊封の和議を結んだのであり、和議以後の

朝貢は和議以前の倭寇の別の顔であらう。残念ながら『おもろさうし』には南京北京に朝貢した際の見聞が詠まれず、えらぶの朝貢も明確には詠まれない。

洪武六年、七年の間、『純心人文研究』紀要第二十七號に引いた福建側の諸記録では、倭寇は敗れた場合に琉球の方向へ撤退するので、琉球倭寇だと考へられる。琉球側で代表的倭寇の一人こそえらぶ孫八であるから、孫八が半商半賊の朝貢者となつても不思議ではない。

亞蘭匏の最古の史料は、『皇明實録』洪武十五年(西暦千三百八十二年)陰曆二月に中山使節として朝貢し、明國の尚佩監の奉御(宦官)路謙を伴つて琉球に歸國してゐる。翌年陰曆正月、路謙らは亞蘭匏とともに上京し、三山分立について洪武帝に報告し、ついで十一月、北山王怕尼芝が初めて明國に遣使朝貢する。

路謙に三山分立を知らせ、怕尼芝を朝貢させたのは、琉球唐人が仲介したのだと、田名眞之氏は推測してゐるが、それではこの年に急進展した説明にならない。田名氏説は氏著『古琉球の久米村』に見え、平成四年、琉球新報社『新琉球史・古琉球編』収める。

私はえらぶ亞蘭匏が北山王を仲介したと考へる。年代の辻褄を合はせれば、西暦千三百八十二年の最初の使節亞蘭匏を孫八として、西暦千三百九十四年の中山王相亞蘭匏をえらぶ世の主と解すれば通じる。王相は王親(王族)でなければならず、政績や年齢を問はず北山王子がふさはしい。

筆者が立てる筋書きは次の通り。西暦千三百七十二年から十年間にわたり朝貢の主役は泰期であつた。西暦千三百八十二年、亞蘭匏が泰期に伴はれて初めて明國に朝貢するが、その亞蘭匏は大倭寇にして永良部世主の重臣孫八であり、すぐ翌年北山王の朝貢を仲介する準備を兼ねたのではないか。北山王は仲介に對する論功行賞として、北山王子永良部世主の朝貢時に中山王相を名乗らせることを中山王に求め、中山王はこれを許容して合従連衡を維持した。そして亞蘭匏は西暦千三百九十四年に中山王相と稱したが、この亞蘭匏は永良部世主自身(または孫八が世主の名義で代理朝貢)であらう。洪武帝は王相亞蘭匏を明

國の王府の長史と同等と認定した。ずっと後に久米村の唐人が長史を名乗るが、最初の長史亞蘭匏を唐人とする近人説は無稽の臆測に過ぎない。

始皇帝以後、王の地位は歴代異なる。前漢の郡國制では各地の國王が實権を有したが、明國洪武帝が各地に封建した王には實権が無い。『皇明實錄』洪武三年正月によれば、王府に左右の王相を正二品と定めたが、洪武二十五年十一月に改定した文武百官の職位では王府に王相を置かず、左右長史を正五品としたのが王府中の最高位である。各省では從二品の高官が行政の實権を擁し、虚實二重の官制を成す。

洪武二十七年に琉球王相亞蘭匏を長史と同等の官位としたわけは、明國が既に王相の職を廢したにも関わらず琉球側から歸國の手土産として王相職を要求したので、やむを得ず洪武二十五年以後の王府の最高位たる長史と同じ正五品を以て琉球王相に充當したのである。これに關聯して前人の論考が少々ある。明國の王府は虚設であるから、正五品の長史も無權の名譽職に過ぎない。

明國內の王府であれ國外の朝貢國であれ虚設なることは等しいので、「華夷秩序の國際法で琉球を國家として承認してゐた」といふ説は成り立たない。まして國際法が國內法を超越するのは近代以後であるから、近代以前の何らかの國際的認定制を近代基準で超越的とするのも誤りである。

虚制の慣例はこのやうに南北朝末の琉球倭寇集團に始まり、慶長年間に倭寇から薩摩藩に移讓された後も、西暦千六百十五年に薩摩は琉球の名義でスペインと貿易し、幕末のバリ萬國博覽會にも「薩摩琉球國」の名義で出展した。虚實二重の東印度會社梁山泊こそ琉球の一貫した「かたち」である。

## 二、沖永良部の馬と硫黄

傳説上、琉球王の祖先は多く北から来る。天孫氏あまみく（阿摩美久）は北の邊戸岬から南下し、源爲朝は運天港に上陸して舜天王を産み、尚巴志の祖は伊平屋島から出て佐敷新里に這入り、第二尚氏の尚圓王金丸は伊是名島に生ま

れた。

永良部世の主の家系は宗氏を姓として近代まで續く。子孫はまた別姓「平安統」（ひあんとう）を名乗るので、平家としての自己認識かも知れず、沖繩島北部の邊土名（へんとな）や邊戸（へど）も同源かも知れない。對馬の宗氏も平家を名乗るので、かりに兩者が同源ならば、古代の任那から中世の八重山まで日本の覇権が見えて来るであらう。

江戸時代初期の『中山世鑑』卷一「琉球開關の事」によれば、あまみくの島産みは最北端の邊戸岬から始まり、東に巡って久高島から佐敷の東の知念を経て首里に至り、九か所を産み終へる。これにもとづく琉球神道は、北から東南を経て首里まで九大御嶽（うたき、おんたけ）を根幹として、あたかも尚巴志が北の祖先から東南の佐敷を経て首里の主となった経歴そのものに擬するが如くである。

そして「北と東南と中」といふ三足鼎立の形が、そのまま三山時代の北山・南山・中山となつてゐる。かつて大林太良著『東アジアの王權神話』では、これを世界に普遍的な三機能神話と解釋したが、私は史實が神話に反映されると考へる。

西北の本部町の具志堅・瀬底・新里は、佐敷と知念にも同地名があり、沖繩本島内では他に無い。三山鼎立を反映するのもかも知れない。あまみくが東海岸を南下したのも、倭寇の進出路線の痕跡なのか、東の海神「にらいかない」と關聯するのか、考古學や遺傳子學による解明を期待したい。

洪武二十五年（西暦千三百九十二年）陰曆五月、『皇明實錄』によれば琉球國の民「才孤那」らが硫黄を採掘すべく河蘭埠へ（もしくは河蘭埠から）駕舟（渡海）したが、臺灣島を経て廣東に漂流し、倭人として南京に送られ、そこに琉球使節が来たので共に歸國させた、とある。原文は「駕舟河蘭埠」に作る。

西暦千五百五十六年の明國鄭舜功『日本一鑑』は、沖永良部の西北側の硫黄島島の屬する本山（主島）を河蘭埠としてゐて、明らかに永良部である。小葉田淳著『中世南島通交貿易史』第二百七十七頁では、河を阿の誤寫として、阿

は伊・永の轉音だと判ずるが、鄙見では草書で河と伊とは形似ゆゑ、音誤でなく形誤により伊蘭埠を河蘭埠に作ったのであらう。

他に西暦千六百六十四年張學禮『使琉球紀』で伊藍埠に作り、西暦千六百八十四年汪楫『使琉球雜錄』卷二で伊蘭埠、西暦千七百二十一年徐葆光『中山傳信錄』卷三で河蘭埠、卷四で伊蘭埠に作るのは全て永良部であらう。洪武年間のア蘭砲と共通に「ラン」に「P」を加えてラブに充當してゐる。

才孤那に三解が考へられる。第一に沖繩島西北部の瀬底(せそこ)島か。昭和四十六年國立國語研究所『沖繩・瀬底方言』によれば、瀬底は地元でシートとも呼ぶ。今、語尾の「な」を「の」の轉音とすれば、「瀬底の」島の民が才孤那だと解釋できる。第二に手孤那の誤寫とすれば、沖繩島東南部知念の須久那森・須久那御嶽の地が該當し、尚巴志飛躍の地として有力である。

第三に與論島に瀬古名(せこな)といふ地名があり、谷川健一『民俗地名語彙事典』下巻、角川『日本地名大辭典』第四十七冊沖繩卷などに見える。與論町役場ホームページでは瀬根奈に作る。才孤那が與論島の「せこな」氏だとすれば、沖永良部・與論・琉球といふ繋がりとするが、ただ與論島の瀬古名はあまりにも郷間の小地に過ぎず、擬し難い。

『皇明實錄』の「駕舟河蘭埠」は、漢字に語尾がないため「永良部から」とも「永良部へ」ともなり得るが、いづれにしろ琉球國人が硫黄を採掘する以上、西暦千三百九十二年に沖永良部はすでに琉球北山國の統治下だったことが分かる。明國などに硫黄を輸出するため、沖永良部は琉球王の下で發言權が強かつたはずである。さうなると沖永良部の大倭寇孫八が琉球のア蘭砲として明國に朝貢して不思議なく、さらに北山王子が永良部世の主となって明國で琉球王相を名乗るのも、沖永良部の大覇權に合致する。

『日本一鑑』は西暦千五百五十六年に廣東の鄭舜功が未知の日本に潜入し、手寫文書を往々誤讀しつつこれを著したため、島名の考證には福建字音を基本としながら字形を考慮せねばならず、かなり厄介である。

『日本一鑑』の航路は沖繩から北へ、熱壁山(伊平屋島)、河蘭埠(永良部)、

田嘉山(徳之島)、夢家刺(かけるま)、大羅山(奄美大島)、七島(とから七島)、と並んでゐる。位置の相關や記述から、島々の各該當は確かであるが、漢字の充當が不可解である。

藤田元春『籌海圖編日本航路考』(昭和十年、地球學團『地球』第二十四卷第二號、第六號所收)、は夢家刺を家刺夢の倒置だとして強ひて加計呂麻の音に近づけたが、倒置説はかなり無理がある。鄙見では夢は簡の草書の形似であらう。簡家刺ならば福建語で「カンケロア」となり、加計呂麻に近づく。

加計呂麻の末尾の「ま」は古語で島(しま)、山(やま)、間(ま)など場所を表はし、慶良間・波照間・鳩間・多良間など、「ま」だけで島を指すことは良く知られる。よって加計呂麻は「かける」の島と考えて良く、簡家刺の音に更に近づく。大羅山は奄が「大」と「屯(屯)」との二字に分離され、大の下部がづぶれて羅と誤認され、大羅になったと考へられる。

徳之島は他資料で毒島もしくは度姑島に作り、「とく」の音は間違ひないが、なぜ田嘉となるのか。今これを釋すれば、同葦の形似であらう。同は福建語でタンともトンとも讀まれ、「同葦」ならばトンコとなり、少しくトクに近づく。

薩摩時代に於いては、奄美諸島の中で硫黄島だけが琉球王府の泊村の直轄となり、明治になると硫黄島島の人々は久米島の鳥島集落に移住した。津波古敏子説では、近代久米島に遺留する鳥島方言は、那覇語及び山原北部語を基本としつつ、徳之島語の要素を雜へてゐて、生活中で徳之島との往來が多かつたことに起因するといふ。山原北部語は三山時代の北山領域であり、沖永良部語と同類とされるから、今推測すれば硫黄島鳥島語は、沖永良部語の古層の上に近世薩摩勢力下の徳之島方言及び琉球側の那覇方言が重なつたのではないか。

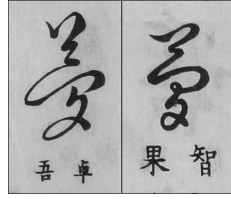
硫黄島鳥島方言については、以下著作三種を参照できる。

津波古敏子「硫黄島鳥島方言の諸相―硫黄島鳥島方言はどの方言圏に屬するか」、『鳥島移住百周年記念誌』所收、宇島鳥移住百周年記念事業実行委員編、平成二十一年。

仲原樓「沖繩縣久米島方言」、國立國語研究所『平成26年度、危機的な状況

にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の實態に関する調査研究事業（八丈方言・國頭方言・沖繩方言・八重山方言）報告書」第七十五頁所收、平成二十七年三月。

長嶋俊介「硫黄島島の奄美群島との近接性と歴史・生活痕跡」、平成二十三年、國際島嶼教育研究センター『南太平洋海域調査研究報告』第五十一冊。



右は隋・釋智果の「簡」。

左は明・李卓吾の「夢」。

寶永二年跋刊本『草露貫珠』より。

琉球倭寇の海路は北に奄美諸島、五島、濟州島、任那地域へと伸びていて、奄美諸島は「道の島」とも呼ばれて南北往來の要道であったが、薩摩を経由しない。西暦十六世紀より以前、薩摩は疎遠であった。首里城で出土した黒瓦の最古層は朝鮮半島の陶工が來琉して焼製したもので、琉球國初期には朝鮮半島との往來が多かったことを示す。任那からマラッカまで武威を振るった琉球倭寇が、各地の技能者を雇用乃至劫奪誘拐して使役したのであらう。

西暦千三百七十二年から琉球國が明國南京に輸出したのは硫黄のみならず毎年數十頭の馬を算へるが、輸出役の大使が亞蘭匏即ち永良部であるから、沖永良部島は硫黄のみならず馬も交易してゐた筈である。南船北馬といふ通り、馬と船とは全く異なる文化だが、倭寇は兩者を併せ持ち、渡洋船中で馬を飼養することもできたであらう。琉球學の大家、吉成直樹氏らは廣域倭寇が濟州島や對馬の産馬を沖永良部で存留した後に明國に輸出したと推測してゐる。

『おもろさうし』中で吉成氏が注目するのが「永良部世の主の選んでおちや御駄（みぢや）群（ぶれ）」といふおもしろである（巻十三、通番九百三十六）。

沖永良部島は馬群を選ぶ中繼點だったと考へられる。與那國馬、對州馬、喜界馬などには有名だが、永良部馬といふ馬種は無い。産地でなく中繼點だったがゆゑだらう。硫黄と併せて輸出するには好位置に違ひない。

沖永良部の民話「天の庭」に、五十も百もの馬群から若武者が名馬を選び、鞭打って那覇に飛び、琉球王の姫を奪った話がある。昭和十五年、岩倉市郎『沖永良部島昔話』第二百十八頁に見える。沖永良部が硫黄交易で榮えた時代の倭寇であらうか。

若武者が首里で奪った琉球王の姫の名は「みしよだい」といふ。この民話の類話は沖永良部の上平川（久志檢の西）でも採集され、田畑英勝「奄美諸島の昔話」（NHK出版、昭和四十九年）に見える。薩摩統治時代よりも古い倭寇的色彩が濃厚である。

昭和五十七年『知名町誌』所載「花沖神社由緒記」（第九百九頁）によれば、えらぶ世の主の母系子孫とされる人々が傳へた昭和三年ごろの傳説に「みすだい」の名が見えて、世の主の娘となつてゐる。琉球王の姫みしよだいと世の主の姫みすだいで辻褄は合はないが、世の主時代の貴婦人といふ形象は共通する。

沖永良部史の大家・先田光演氏「沖永良部島の伝説」（昭和五十九年三月『鹿兒島民俗』第七十九號所載）によれば、世の主の家來の稻當（にやあと）ユシリが駿馬で岩に降り立つた蹄の跡が、沖永良部の玉城村にあるといふ。ユシリとは世知り（領主）であらう。あたかも民話の天馬とつながる形象である。沖永良部の後蘭の南側、上平川の東側に久志檢（ぐしけん）村があり、沖繩島本部町の清ら海（ちゅうらうみ）水族館所在の具志堅村と同源であらう。奄美にも久志堅といふ舊家があり、昭和五十五年龜井勝信『奄美大島諸家系譜集』（國書刊行會）所收「久志堅家系譜」によれば、元祖は江戸時代に出るとのこと、如何なる繋がりが分からない。

『球陽』尚圓王追記と尚貞王二十一年によれば、北から來た第二尚氏の始祖尚圓王金丸は、創業時に海難で具志堅の上間（うへま）大親に助けられ、功を

録して大親の子に首里で采地を授け、首里に具志堅といふ地名が生まれた。

伊波普猷『馬場の琉球語』及び東恩納寛惇『南島風土記』眞和志村・具志堅の條によれば、上間具志堅の志堅が轉音して識名となり、琉球最大の識名馬場（馬術場）となるが、上間の語源は追ひ馬ではないかとする。琉球方言でも馬場を馬追ひ（まうひ）と呼ぶ。本部町の上間も追ひ馬が語源かと推測することとなるが、水族館の北側、具志堅の備瀬集落にも馬場があったことは、明治十三年『沖繩縣統計概表』馬場の章に見えるものの、繋がりには分からない。

本部港所在地は健堅（けんけん）といふ集落であり、馬匹交易の起源とされる。『琉球國舊記』卷六、卷八及び『琉球國由來記』卷十九によれば、健堅の海から渾身純黒の馬が躍り出たので漂流唐商に贈った處、戦亂中の洪武帝は良馬を必要としてこの馬を大いに喜び、琉球との大交易が始まる。疑ふらく洪武五年の朝貢開始を指すであらう。海から馬とは倭寇的色彩であるが、史實と整合性が高く、『球陽』察度王紀にも追記され、本部港が「唐泊」と呼ばれる。唐（から）はチャイナとは限らず、グラルのやうな倭寇船を指した可能性もある。

柏常秋「沖永良部島の家畜飼養習俗」（昭和三十三年二月『鹿兒島民俗』第十九號）によれば、近代の沖永良部で馬の飼育は極少だったといふ。ところが世の主時代の馬群傳説はなぜだらうか。この問ひは、西暦千三百八十二年から永良部亞蘭匏が琉球使節として明國に馬と硫黄を輸出した記録で解ける。

### 三、懷機と尚泰久と泰期

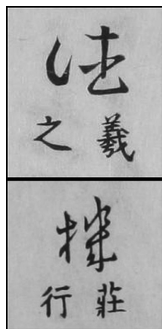
亞蘭匏が唐人に非ざるのみならず、國相懷機もまた唐人ではなく、越來按司である。『純心人文研究』第二十七號では懷機を宇江喜に擬したが、懷機は福建字音が「クイクイ」であり、尾音が脱落すれば「クイク」となつて「越來」に該當する。越來は琉球國初期では有力按司の一つであり、琉球方言で「ぐいぐ」とも呼ばれる。明國には鬼谷・隗谷・魏古の名で繰り返し使節として派遣

され、いづれも福建省の讀みで「グイク」と讀まれる。懷機もグイクの一變形に外ならない。

懷は福建でも北方語のまま「ホアイ」と讀むのが主流だが、福建南部の廈門の口語では「クイ」と讀む。もともと等韻の匣紐は秦漢以前のガグゲゴ音から福建口語の清音カクケコに轉じたので、クイ音はホアイ音よりも大いに古い。機は廈門で通常キ音だが、布機（ポークイ、織機）といふ二字語に口語音クイが遺存してゐる。また「幾」が單獨でクイと讀むので類推し易い。

懷機の最も早い史料は、『皇明實錄』永樂九年（西暦千四百十一年）陰曆二月、王相の子「懷得」（懷德）が國子監に入學する。得も徳も草書は機に形似するので、懷得は即ち懷機であらう。王相とは越來按司であり、その子も越來即ち懷機と名乗つたであらう。

次に『皇明實錄』永樂十六年（西暦千四百十八年）陰曆二月、懷機は長史として朝貢する。長史亞蘭匏は王相であつたから、長史懷機も越來按司にして王相であらう。繼いで西暦千四百二十七年の「安國山に華木を樹うるの記」に國相懷機が見えて、西暦千四百二十八年から『歷代寶案』第一集第四十三卷では懷機署名の外交信書が尚泰久王代の前まで續く。西暦千四百十一年から四十年間の懷機は同一人物ではなく、二代乃至三代を經る越來按司であらう。



上は名筆王義之の「徳」、下は金莊行（不明人物）の「機」。『草露貫珠』第五卷第六十六葉と第九卷第三十九葉、隆文堂、大正二年、國會圖書館347-2。

そして懷機が琉球王となつたのが尚泰久であらう。尚泰久は西暦千四百五十三年に王位を繼承する以前、西暦千四百三十五年に越來王子として領地を與へられる。自身が越來按司となつたのであらう。西暦千四百五十六年には魏古城に梵鐘を寄捨したことが『琉球國由來記』卷十「安國寺」條に見える。魏古は

越來である。また『おもしろさうし』でも尚泰久が越來按司の子とされてゐることは下に述べる。西暦千四百五十三年に尚泰久が王位を繼承する前まで『歴代寶案』の懷機の記録が終るため、両者が同一人物として符合しやすい。懷機の大事績に匹敵する有力者は尚泰久以外に想定しにくい。

『歴代寶案』第一集第四十三巻によれば、西暦千四百三十六年から千四百三十九年までの間、懷機は尚巴志王及び世子尚忠の名代として道教の神符を乞ふ信書若干通を江西省天師道に送った。神符乞請だけでは道教篤信とするに足りないが、注目すべきは文中で世子及び懷機、乃至王及び懷機といふ措辭で高く自ら並列し、自身が王親（王族）であるかの如くに見える。懷機が尚泰久だとすればこの疑ひは解ける。

西暦千三百七十二年の貿易開始から最初の十年間、輸出役は中山王弟の泰期であった。泰期に該当する琉球側の人物は「たちよもい」（泰期思ひ）とするのが定説で、『おもしろさうし』第十五巻（通番千百十六から千百十九まで）には、讀谷の宇座の「たちよもい」が海に出て唐あきさなひ（明國貿易）を盛にした事績が歌はれる。しかし他史料で泰期（たち）は浦添もしくは具志川の天願城を根據とするばかりであり、宇座が泰期に結びつけられることは全く無いので、宇座泰期説は失當であらう。宇座のたちよもいは泰久即ち後の尚泰久に擬すべきである。

十年を経て西暦千三百八十二年に亞蘭匏が泰期とともに明國に派遣され、以後は亞蘭匏が硫黄と馬の輸出の主役となり、泰期は退場する。續く西暦千三百八十三年は初の北山王使が亞蘭匏とともに明國に渡ったので、この年を境目として泰期が貿易利権を譲渡し、沖永良部及び北山今歸仁が直接硫黄と馬を輸出するようになったと考へれば理解し易い。

宇座のたちよもいと別に、『おもしろさうし』第二巻（通番七十八）にはたちよもいが越來世の主（越來按司）の子として詠じられる。岩波文庫本の外間守善注では越來のたちよもいを尚泰久だとして、同名の別人に擬して泰期を「たき」、泰久を「たきよ」と解釋する。

しかし鄙見では宇座と越來の兩たちよもいは同一の尚泰久である。内陸の越來は自ら外港を領有してこそ直接貿易が可能であり、その地が宇座だとすれば通じる。尚泰久の海外貿易の事績は載籍に罕見だが、泰久、たちよもい、懷機、越來が全て同一だとすれば諸史料を通解し得る。

尚泰久は越來王子に封ぜられたので、もともと越來按司の子であれば世襲となり、常理に合する。對外的には尚泰久は尚巴志の子とされるが、王位の安定繼承を装って詐稱した可能性があり、必ずしも事實ではなからう。琉球は海賊の梁山泊の如き集團であり、外間に實情を知らせない。

上述の平安統氏著「世の主由緒書」によれば、永良部世の主は名馬と寶劍とを愛し、その噂を聞きつけた琉球王の間諜に寶劍が盗まれ、痛悔するうちに北山が中山に敗れ、永良部世の主も中山に降伏したといふ。文中の寶劍の名は「菜津々三」となつてをり、「な」の「つづみ」即ち刃鼓であらう。

一方、琉球王府には千代金といふ名劍が秘藏せられ、現在は國寶として那覇市歴史博物館の藏に歸してゐる。千代金の刀柄と鞘とはアラブや西洋の製造に似て、大きな柄尾は隻手でこれを執る様式であり、雙手の和刀と異なる。柄尾に「大世」二字が刻まれてゐるため、大世主尚泰久が柄と鞘とを作らせたとするのが定説である。しかし尚泰久とアラブ西洋方面との繋がりを示す史料は多くない。今、尚泰久が懷機の名で東南アジアと交易してゐたとすれば、寶劍の洋風裝飾の疑ひは氷解する。

千代金丸の刀身は、『中山世譜』によれば北山王が中山に滅ぼされた時にこの刀で自害して川に投げ捨て、伊平屋島の人が拾ひ出して中山王に献上したといふ。この千代金丸は、永良部世の主の菜津々三と同一物ではないだらうか。筆者は永良部世の主からの盗品の來歴を伊平屋島にこじつけたと疑ひたい。

徳之島の勝氏といふ役人の家系の墓で今を距てる五十年前に洋劍（サーベル）が掘り出され、現當主勝信貴氏のユーチューブビデオで公開されてゐる。琉球大航海時代の遺物か、或は江戸時代の漂着船の遺物か、研究と保存が待たれる。



#### 四、使節の順位

上述の通り西暦千四百十八年に懐機が長史として朝貢した。長史亞蘭匏の地位を継いだと考へられる。兩人ともに王相である。後に長史は唐人の慣例職となるが、早期の亞蘭匏及び懐機は唐人ではない。唐人が長史となるのは西暦千四百十一年の程復に始まること「純心人文研究」第二十七號で述べたが、程復の次には西暦千四百二十四年（皇明實録永樂二十二年）に朝貢した鄭義才が長史である。程復が亞蘭匏の前例にならひ虚設の國相及び長史を授けられたため、唐人の權益として鄭義才も長史となったのであらう。

しかし琉球から明國や東南アジアへの使節の首席は基本的に唐人ではない。「皇明實録」洪武二十四年（西暦千三百九十一年）陰曆二月に朝貢した亞蘭匏（えらぶ）と鬼谷（ごえく）兩雄のやうに、權勢ある按司級の人物こそ朝貢の主役であった。

後に「歴代寶案」第一集第十六巻にも西暦千四百二十七年以後「魏古渥制」として越來按司が見える。渥制の福建音はアチエ、即ち按司である。魏古渥制は「歴代寶案」同巻の西暦千五百三十四年に「魏古結制」に作る。西暦千四百三十五年の「魏魯結制」も魏古の誤寫だらう。結制は福建音でカチエとなるが、また多く結致に作り、福建音カチエとなる。「皇明實録」西暦千三百八十三年陰曆十一月には結習に作り、福建音はカシとなる。

渥制の按司音に準ずるならば、結制等は若按司（わかあじ）から頭音「わ」が脱落したのではないか。但し「おもるさうし」諸巻では若君を「わかてだ」と呼ぶので、「若按司」「わかあじ」の音でどこまで年代を遡及できるか、なほ考索を要する。

結制は歴代史料に多見するが、東恩納寛惇氏は「皇明實録」西暦千三百九十年陰曆正月の通事「屋之結」から倒置して結之に誤ったと推測し、これを「うっち」と讀んで定説となつた。東恩納寛惇「琉球人名考」第五章に見える「爐邊叢書」第二十六冊、昭和元年）。しかし一度の誤倒置から恆久成例とす

る解は牽強を免れない。それよりも屋之は福建音で「オチ」即ち宇地か宇地原、宇地泊だらう。屋之結制（宇地若按司）の脱文とすべきではないか。

『純心人文研究』第二十七號で述べた通り、唐人程復が虚設の國相に任命された際にも、國頭按司が大使であり、程復は次席に過ぎない。その後も地元豪族は琉球和名を持ち、正使や王舅の名義で明國や東南アジアに派遣される。久米唐人は長史・正議大夫などの名義で派遣され、順位が正使の前に越えることは無い。分かり易い例が西暦千五百六年から千五百七年の間に明國に派遣された首席が亞嘉尼施（赤西）で、久米唐人蔡賓は次席である。「歴代寶案」第一集の巻二十五に見える。

イブン・マージドの航海術書『Kitab al Fawa'id』、1576年、フランス國家圖書館藏原本、Arabe-2292 (MS-2292)。

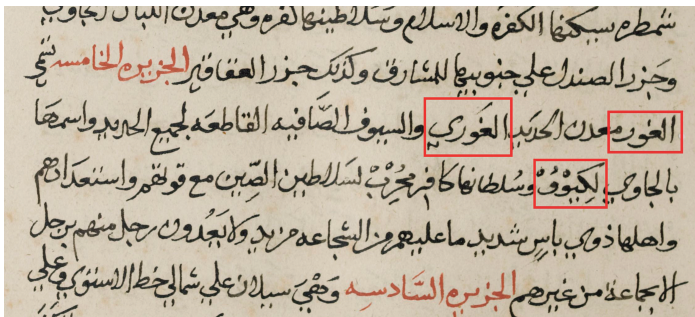
「Recueil d'ouvrages relatifs à la navigation, par Šihâb al-Dīn Aḥmad ibn Māğid ibn Muḥammad ibn 'Umar al-Sa'di」

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53127332s/f158.item>

電子 158 頁 (folio69)

line10 & 11 に AL-Ghur, Al-Ghuri, Likiwu。

「[الغور] Al-Ghur。[ليكيو] Likiwu。」



東南アジアに派遣された琉球使節はアラブ語でAL・GHUR(アル・ゲール)、ポルトガル語でゴール(ゴレス)と呼ばれ、別名がアラブ語でLIK I WU(リキウ)、ポルトガル語でレキオとなり、琉球倭寇を指すと考へられる。令和二年度『純心人文研究』第二十七号ではAL・GHURが琉球の漢字音かと認定したが、かなり無理であった。沖永良部の後蘭、ゲラル、ガーラ、甲斐等に繋がるといふ説が正しいであらう。琉球豪族ゲラル、ガーラ、ゴールスが使節の主役として西方の航海者に記録されたのであらう。

その代表的史料、アラブ人イブン・マージドの航海術書から、『純心人文研究』第二十七号ではガブリエル・フェランの西暦千九百二十一年影印本を掲載したのだが、その後、フランス國家圖書館に鮮明な電子圖像が公開されてゐることが分かったので今それを掲載する。

## 五、三山時代、山南のしゅんべじ

三山時代の最大の王が中山王察度(さつと、里)である。通説では浦添出身とされるが、浦添には里を含む地名が無く、里主のやうな役名としても小さ過ぎる。

察度と同時代の南山王が承察度である。通説では大里(うふさと)に擬せられ、絲満の島尻大里か、南城市の島添大里かと推測されてゐるが、承を大(うふ)とするのはどうにも通じ難い。ただ、南部には里を含む地名が多いのは確かである。

そこで福建音を援用すれば、承察度は「しんちゃつ」となり、「ん」の下は濁音が通例なので「しんざつ」と、即ち佐敷の新里(しんざつ)である。N+濁音の方法は古代からあり、例へば但馬(たちま)は古代音「たていま」(TADIMA)であり、Dの濁音を示すためにN尾音の但をあてはめてゐる。

承察度は佐敷の新里を以て渙然水釋する。新里は尚巴志一族の淵源であり、南山王承察度はそこに關聯する人物であらう。尚巴志は佐敷新里から出て察度

王統を倒し中山王となったが、佐敷は南山王領であるから、尚巴志の父祖の主君が新里の承察度だったことになる。『皇明實録』永樂九年四月に尚巴志の父尚思紹は中山王察度を自分の祖と呼んでゐるので、尚巴志は自分の祖統の察度を倒したことになる。

『皇明實録』西暦千三百七十四年(洪武七年)陰曆十月、中山王弟泰期とともに副使として「蘇惹爬燕之」が派遣される。北山勢力はまだ朝貢を開始しないので、副使は南の豪族であらう。福建字音を當てはめると蘇惹爬燕之は「すじゃぺえんち」となり、「すざべじ」に該當する。琉球王府編纂の辭典『混効驗集』坤卷には「すざへ、兄の事なり」とある。

燕の尾音Nは次の字の濁音を示すので、燕之は「えじ」に該當し、爬燕之の三字で「べえじ」となる。『皇明實録』の蘇惹爬燕之の下には「二人」とあるが、諸本中には「二人」を伴わない寫本もある。五字は長すぎるので筆寫者が蘇惹で一人、爬燕之で一人と判断し、小字で二人と注記し、正文に混入したのだらう。二人を伴はないのが當初の原文と考へられる。

『皇明實録』洪武十三年(西暦千三百八十年)陰曆十月、中山王察度が亞蘭匏(えらぶ)を派遣した時に、同時に南山王承察度は「師惹」を派遣する。師惹の福建字音は「すじゃ」と讀み、矢張り琉球古語の「すざ」(兄)である。洪武十六年(西暦千三百八十三年)陰曆正月、承察度は再び師惹を明國に派遣して交易する。

尚巴志の福建音は「しゅんべじ」で、矢張り琉球古語「すざべじ」(兄部子)に該當する。尚巴志の父尚思紹の福建音は「ししゃお」なので、同じく琉球古語「しざ」(兄)であらう。すざ(べじ)の語源は兄であるが、南山では大領主の敬稱であった。「おもるさうし」第二十卷は絲満の巻であり、絲満市山城の領主を「やまきたら(山城太郎)すざべ」として繰り返して歌ふ。

すざ(べじ)は蘇惹爬燕之・師惹・思紹・尚巴志といふ福建字音で歴代記録されるが、全て南山の豪族である。初期明國貿易は中山王察度の使者を中心として、副使らしき人物が斷續的に記録されるが、それぞれ北山と南山の豪族で

あらう。南山系統は蘇惹爬燕之の後、1380年の師惹、そして承察度（しんざと）が1396年まで續き、さらに思紹が1407年から1424年まで續く。蘇惹爬燕之、師惹、思紹、尚巴志、みな代々すざべじを繼承するばかりで、個人名が見えない。

宇座及び越來の奉久（懷機）、浦添の牧港の察度及び奉期、佐敷の新里の承察度、佐敷の尚巴志、北山の攀安知（はねじ）など群雄が合従連衡しつつ、時ごとの強者が王となったのが、倭寇琉球の實像ではないか。

これら群雄が割據した琉球の特徴は船、貿易、硫黄、馬、武士である。海民でありながら魚と漁業は特徴の内に無く、群雄は漁民ではない。朝鮮半島南部から對馬、沖永良部、沖繩島、宮古八重山、福建、臺灣、そして遠くマラッカまで、股にかけて覇権を取った倭寇こそ琉球の王だったので、もともと漁民ではなかったのだらう。

近代以前の琉球に漁業がほとんど無かったことが疑問とされて來たが、倭寇大貿易世界として読み直せば氷解する。その中で唯一絲滿人だけが大海域を股にかけて漁をしてをり、明治初期に尖閣で漁をしたのも絲滿漁民である。

## 六、山南のさとうぬし

三山時代の南山で「すざ」とともに多いのが「さと」であり、鳥添大里、鳥尻大里、承察度などがある。「すざべ」（兄）と「里」とは南山國の特徴的な豪族名であらう。「おもろさうし」第十三卷（通番七百五十）には「すざべ大里」とするのが定説である。南山の豪族が國外貿易したのは三山時代であらう。

つづく一首は「すざべ大里の節（ふし）」と題して首里を歌い、前後數首もみな首里を歌ってゐる。南山と首里とは近縁であり、新里から出て首里を取った尚巴志は、すざべ大里自身かもしくは同類型の人物ではないだらうか。關聯して吉成直樹はか『琉球王國と倭寇』（森話社、平成十八年）第二百九十二頁

などが参考になる。

『おもろさうし』第十四卷（通番千十八）に「てどこのさとぬし」（里主）、別名「てどこの大やこ」（大屋子）が詠まれ、大屋子が里主である。里は南山的であるが、『おもろさうし』中で里主はこの一首以外に無い。手登根は南城市の佐敷の村名であり、大豪族として唐の道を開いた（明國貿易を始めた）ことを詠んでゐる。

江戸時代に成った尚巴志の家史『佐銘川大主由來記』は同じおもろを収録し、原注によれば尚巴志が佐敷から出て中山王となり（西暦千四百二十二年）、手登根の大比屋（おほひや）を派遣して明國使を招き、尚巴志に王號をたてまつった賀歌である。島村幸一「佐銘川大主由來記論」（平成二十六年沖繩國際大學南島文化研究所『南島文化』第三十六號所収）が研究として完備してゐる。大比屋は、おほや、うふや、うひや、即ち大屋と同じである。

『皇明實録』永樂二十一年（西暦千四百二十三年）陰曆八月に派遣された尚巴志王使「阿不察都」は「うふさと」（大里）の字音であり、手登根の大屋・里主を指すのが定説である。尚巴志の父及び祖父は佐敷から出て、尚巴志に至って三山を統一した。尚巴志の重臣として明國まで行って貿易したのが、大役人・手登根（手登根の大屋子）である。

『おもろさうし』では「手登根す、にほんうちち、どよめ」（手登根の名よ、日本の内に鳴り響け）とあり、『おもろさうし』中で唯一の「日本」である。この日本は内地やまどでなく琉球を含む日本全土であらう。しかし『佐銘川大ぬし由來記』では同じおもろを「てどこんす、御府の内や豊（どよ）む」に作り、御府は琉球王域を指すと考へられる。疑ふらく幕府の隔離政策により、おもしろるの所詠域が日本全土から琉球へ縮小されたのであらう。かりにこの「日本」が内地だけを指すならば、片や内地、片や琉球となり、兩本で語義が正反してしまふ。かりに御府から日本に擴大されたならば、『おもろさうし』中にこれ以外にも日本が頻出する筈である。どちらも解釋として通せず、この日本は内地と琉球とを併せた全日本と解すべきである。

『皇明實録』の阿不察都は後に阿蒲察都となり、景泰二年（西暦千四百五十一年）陰曆正月と二月には「王察都」となる。王察都は「わんざと」でなく、福建音で「おんざと」であり、「おほざと」から「おおざと」へ音變を反映するであらう。

以上のやうに歴觀すれば、西暦千三百七十二年に中山國が明國に遣使貿易を始めてから、大使・副使として歴年派遣されたのは北山と南山の老等級乃至王自身ではないか。蘇惹爬燕之、師惹、承察度、思紹、尚巴志が全て南山の「すざべじ」（兄、王）等の豪族であり、一方で北山や北方勢力から派遣されたのが王相亞蘭匏、北山王怕尼芝だったのではないか。これを補ふのが明初の謝肅『密庵集』戊卷の詩である。詩題に曰く、

「行人蔡英夫、流求國王に印寶を領かつ。すなはち國王の來享する者二人とともに海舟を駕し、福建より舵を起こす。」

これは洪武十八年（西暦千三百八十五年）陰曆正月に琉球三山が南京に遣使し、その歸途に明國の使者蔡英夫が、琉球の使者二名とともに福建から出航した時、送別した詩である。注目すべきは、「國王の來享する者二人」を文字通りに讀めば、北山・南山の國王二名が自身で明國に朝貢したといふことになる。さらに詩句に曰く、

「兩國の夷君、絶島に歸る。」

と。夷國琉球の兩君主が絶遠の島に歸る、つまり使者でなく北山と南山の國王自身を指す。

筆者は當初これを使者の省略かと疑ったが、重ねて審視すればやはり北山と南山の國王自身が南京に渡ったのではないか。國王は倭寇であるから、南京で要求する王位は貿易の手工産に外ならない。歴代の南山の「すざべじ」にしても、北の王相にしても、使者か王自身か區別がつかない。ただ謝肅が使者を南北兩山の國王夷君と詠じたのは確かである。南山國の實態はこれまで五里霧中だったが、すざべじや新里、手登根などの解明とともに全體像が次第に姿を見せつつある。

なほ、この詩で行人蔡英夫が琉球に渡航することは、福建師範大學の研究所長による新発見だとして、『琉球新報』が平成二十七年十月五日に報じた。しかし行人の同行はこの詩の『四庫全書』提要ですでに注目されてをり、全く新発見ではない。しかも明國初期の『永樂大典』や他の著名叢書にもこの詩は収録され、新史料でもない。『永樂大典』卷三千五、第二十一葉所録の同じ「流求國王印寶」詩にも「國王之來享者」「兩國夷君」とある。

## 七、象の輸入路

『皇明實録』洪武十六年（西暦千三百八十三年）陰曆正月、亞蘭匏が南京に遣使せられ、同年陰曆十一月五日に北山王怕尼芝の第一次遣使も南京に至る。實録中にはこの北山王の使者が亞蘭匏か、交易品は馬や硫黄か、記載してゐない。しかし實情を示すらしき史料が謝肅『密庵稿』戊卷「洪武十六年、文淵閣に試す」の詩である。この年の陰曆十二月一日に南京の文淵閣で科擧を受験した際の宮中の情景を詠じて曰く、

「象は交趾より來たり、蠻服を經る。馬は流求に出でて、海潮を渉る。」

と。北山王使が朝貢してからわづか二十五日であるから、琉球馬は輸入したばかりの沖永良部の馬だらう。使者は北山王の仲介者亞蘭匏だった筈である。しかし『皇明實録』で安南と占城からの貢象は洪武十一年、十三年、十七年五月、十九年に記録されるのみで、洪武十六年に交趾の象は記録されない。洪武十六年六月に安南使節が象でなく少年宦官二十五名を輸入した記録はあるが、半年前の舊聞に過ぎない。よって十二月一日に詠じられた象は琉球船が安南から福州經由で馬とともに輸入したと私は考へる。

琉球使節が東南アジア貨物を輸入した明白な記録は、『皇明實録』洪武二十三年（西暦千三百九十年）陰曆正月に、亞蘭匏が主導する琉球豪族の聯合使節團が、馬、硫黄、蘇木、胡椒を明國に輸入する。蘇木は東南アジアの染料兼藥材であり、胡椒は香辛料である。諸豪族の中で亞蘭匏の貨物量が最も多く、沖

永良部の硫黄の力の大きさを示してゐる。果たして洪武十六年の象を琉球が福州に輸入したならば、更に早い東南アジア貿易の記録となる。

安南ほか諸國の正規貿易口は廣州であり、福州からは琉球使節のみ入國を許されてゐた。ただし諸外國が福州から貨物を輸入した例外記録はあり、琉球による中繼貿易を示すと考へられてゐる。この時の謝肅の漢詩では「蠻服を経る」と詠じ、「經る」としたことに注目すべきである。公式貿易口の廣州から陸路では渡河や悪路に阻まれるので、琉球貿易口の福州から輸入したはずである。福州には今なほ象園といふ地名があり、象輸入の名残りとしてされてゐる。

謝肅『密庵稿』癸卷葉六によれば、謝肅はすぐ二ヶ月後、翌年に入つて陰曆二月に福建按察司の僉事（中級監察官）として赴任する。その旅程の漢詩「閩關に上る」では、江西省境内から険しい嶺の關所を越えた先の閩省を蠻服と呼んでゐる。

前の詩で象が經た蠻服といふのも、謝肅が赴任決定により福建を意識した用語であらう。象は峻嶺を越え難いので、福州で入國手續きして、象園で休息した後、さらに船で浙江省の寧波まで運ばれた筈である。洪武十六年（西暦千三百八十三年）に琉球船がベトナムから明國に象を輸入したといふ推測が正しければ、琉球は最初から倭寇として武力で廣域覇權を握つてゐた可能性が高まる。

## 八、宦官貿易時代

南山の豪族すぎべじは察度時代から尚巴志時代まで貿易のため明國に派遣され、手登根大里も南山から派遣されたが、同時代に明國からも南山に來航し、『おもろさうし』卷十九の第十一に「知念もりぐすく」は唐船が多く寄るぐすくと歌はれてゐる。入港したのは佐敷灣内の與那原港であらう。明國船が未知の東岸に自分で回り込むはずはなく、南山王が福建から導いた筈である。後の那覇管理貿易の時代には擬し難いので、三山時代に擬すべきである。

この時代、明國は琉球へ頻繁に遣使し、特に宦官が多く琉球で馬匹を購入す

る。今のチャイナでは、この遣使の多さを尖閣航路熟知の證據だとしてゐるが、その前に福建の琉球倭寇こそ多かった上に、後にチャイナ使節は數十年に一度しか來なくなる。ただ宦官時代だけが特殊なのである。

宦官は皇帝の奴隸として外國から輸入されることが多く、海賊や異民族と宦官とは不可分に關はつてゐる。宦官は海外事情に通曉する者が多く、貿易で巨利を得てゐたから、琉球に派遣されたのも宦官貿易の權益であらう。かのアフリカ貿易艦隊の宦官鄭和も異民族であり、イスラム航路を進んだだけのことで、實は偉業ではない。

同時代に明國は海禁令を繰り返し公布し、貿易ならびに海賊を禁じてゐる。科擧官僚は海禁派であり、宦官は通商派であるといふのが明國史を通じての大勢である。

洪武永樂兩帝は側近宦官の貿易を通じて自身も富を蓄へた筈だが、國家安定とともに官僚の力が強まったためか、後に宦官は海外に派遣されなくなり、鄭和の事績も歴史から消える。しかし宦官は明國税關の貿易利權（琉球貿易を含む）だけは保持した。

鄭和の七度の遠征は西暦千四百三十二年が最後となり、恰も琉球三山統一の三年後に當る。明國が宦官貿易から官僚管理貿易へと轉換してゆく時代、琉球にとつて南山國といふ名目は用濟みとなり、三山統一といふ形式を取つたのであらう。宦官の手放した東南アジア貿易利權は琉球の專有となり、巨利をもたらすやうになる。このやうな趨勢から觀れば、南山の知念もりぐすくに入港した唐船は宦官貿易の船だった可能性が高い。

鄭和が大船團を繰り出したのは、チャイナ國內の目で見れば壯舉だが、チャイナ國外では全く注目されなかつた。鄭和がアフリカ大陸東北部のイスラム領域まで行つたのは偉業でも何でもなく、イスラム船は唐の時代に早くもチャイナ沿海部に押し寄せてゐて、その六百年後に鄭和船團が逆コースを渡航したに過ぎない。鄭和が渡つた印度洋はイスラム覇權下の海であつた。鄭和はイスラムのパイロットを雇つてイスラム式の緯度航法で渡航した。鄭和がアメリカ大

陸を発見したといふ説も近年の虚妄である。

一方、鄭和が日本に來航したといふ説はさほど疑ふ必要なく、比較的信頼できる傳維麟『明書』卷七十二「戎馬志三」を始めとして、正統派の史書に載つてゐる。しかし日本側には鄭和來航の記録が無い。鄭和は無名の宦官だったので、日本側では記録する理由がなかったのだらう。宦官貿易の時代だから、宦官は各地に派遣され、その一つが日本だったに過ぎない。

鄭和が數萬の軍勢を率ゐて日本に來たといふ謬論もある。例へば清國『古今圖書集成』「邊裔典」卷三十四「日本部」に、明國の兵書『籌海圖編』から重引して、鄭和が二萬八千の軍勢で日本を勸諭したと書いてある。

しかし二萬八千は鄭和がイスラム諸國へ派遣された際の人数であり、それを日本と混同したに外ならず、編者は鄭和の行き先が日本でもイスラムでも區別する意識が薄かったのである。『籌海圖編』原書の卷六「直隸倭變紀」にはただ鄭和が日本に派遣されたと書いてあるに過ぎない。

西暦千四百三十年前後、鄭和らの宦官貿易時代が終るとともに琉球大航海時代となり、『歷代寶案』には宰相懷機（越來）と東南アジア諸國との盛んな交易が年々記録されることとなる。

## 九、尖閣史料

西暦十九世紀末まで、尖閣にチャイナ船が停泊上陸したことは一度も無い。現チャイナは清國船が尖閣に停泊してゐたと虚構するが、その根拠とする『臺海使槎録』（西暦千七百三十六年）に「大船十艘を泊められる」といふ釣魚臺は、尖閣ではなく臺灣島東南側の小島だと、西暦千九百七十年に臺灣省政府が認定してゐたことは既に廣く報じられてゐる。

他史料では「福建沿岸島から久米島までの間にチャイナ船は停泊できない」と、五度も記載されてゐることも既往の論説に述べた通り。西暦千五百三十四年高澄『操舟記』、西暦千六百八十三年『歷代寶案』琉球王尚貞疏、西暦千六

百八十四年汪楫『中山沿革志』尚貞疏、西暦千七百五十六年周煌『琉球國志略』尚貞疏、西暦千八百八年費錫章『續琉球國志略』である。

さらに、停泊できない共通認識を裏書きする御製詩がある。嘉慶皇帝即位前の西暦千七百七十八年、「周海山（周煌）先生の登舟圖に題す」といふ一首に曰く、

「未だ花瓶嶼に泊せず、また姑米の嶺を尋ぬ。」

と。嘉慶五年殿版『味餘書室全集』卷七、第二十七葉に見える。西暦千七百五十六年冊封副使周煌の琉球行の畫を詠じてゐる。花瓶嶼は尖閣東西航路上の小島であり、明治の日本人がこれを臺灣北方三島の一つに定めたが、清國では位置も分からず、要するに尖閣航路で停泊地が無いことを示す代表として花瓶嶼を詠み込んだのである。

周煌自身の漢詩「海上即事」に花瓶嶼が載つてゐるので、「登舟圖」はそれに對應するものであらう。原圖は散逸し、その跋文だけが發見され、袁明媛「周煌冊封琉球登舟圖原卷跋淺析」で紹介され、『重慶圖情研究』西暦千九百九十四期に收める。なほ、周煌の使行を描く朱鶴年「奉使琉球圖卷」は冊封大使全魁の漢詩にもとづいてをり、「登舟圖」とは別物である。

また、尖閣の國境線の溝なるものも存在しないことを示す史料は多いが、その一つ、徐葆光『船後集』「歸舶述懷」に復路を詠じて曰く、  
「何處過溝界。」自注「海水滄黑、不見溝界。」

と。溝が一度も目撃されなかったことがここでも證せられる。また、福建から尖閣を経て宮古への航路について、徐葆光『中山傳信錄』卷四に曰く、  
「南七島、太平山。用良寅針、至中山那霸港。福建至太平山、自東湧開洋至釣魚臺、北風用單卯並乙辰針可達。」

と。これは琉球側の『指南廣義』から尖閣宮古航路を摘録してゐるが、福建と太平山（宮古島）とを起點と終點として、中間の東湧を福建海域の出口として、釣魚臺を琉球海域の入り口とする意識である。福建と宮古との間で緩やかな海域境界線が東湧と釣魚臺に在り、尖閣は琉球側の島となる。

また、琉球婦人蔡紅享の詩に曰く、

「東湧起風沙、得道在梅花。羅白與金舍、相逢總一家。」

と。これについて李獻璋「琉球蔡姑婆傳說考證」（昭和三十三年『東洋史研究』第十六卷第二號）に既に詳しく考察されてゐる。惜しむらく東湧についてはただ島名とするのみでその意義を論じない。今蔡氏諸傳說中、蔡氏が東湧に停泊したといふ記述はこの詩句以外に無く、何故東湧を詠じるのか、文字の上では不可解であらう。

鄙見ではここで東湧と梅花は沿岸航海の主要停泊地なるがゆゑに詩に詠じられてゐる。普遍的航路概念として、琉球側の船の最前線が尖閣の遙かに西方の東湧であり、福建側の最前線が福建海岸の梅花である。萬曆年間に日本船の最前線が東湧であったことは先行著作で縷々論じた通りである。その同じ航路概念が琉球福建間の蔡氏傳說中に見えることは、倭寇船、朱印船のみならず琉球船にとつても尖閣の遙か西方の東湧が覇権線であったことを示してゐる。

次に、『八閩通志』巻五十一、選舉・科第に曰く、

「丘弘、上杭人、（中略）…奉使琉球、未出境卒。」

と。張廷玉『明史』丘弘傳によれば、琉球へ派遣される途中で卒したのは成化七年である。『明史』琉球傳及び『中山世譜』巻六では丘弘が山東で卒したとする。

この出境とは、嘉靖以後の諸史料にもとづけば明らかに福建海岸であり、尖閣の東の無人島ではないのだが、その年代を成化七年まで引き上げる史料となる。『八閩通志』は弘治庚戌（西暦千四百九十年）に成書した。

次に西暦千八百八十四年の『ゾル・ベルグハウス地圖帳』を挙げよう。沖繩から八重山、尖閣まで全て山吹色で日本領土を示し、臺灣福建はチャイナ領土の赤色に印刷されてゐる。手彩でなく多色刷りだ。この時代は印刷の水準が高まり、着色で明確に領土區分を示す地圖が増える。

ゾル・ベルグハウスとは、ドイツの地圖製作家カール・ゾルとハインリヒ・ベルグハウスである。この兩人はさほど知名度がないが、ドイツのゴータの地

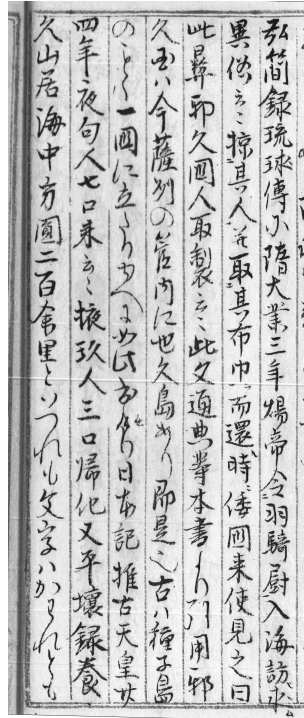
理研究所の地圖製作に攜はつてをり、同研究所の著名地圖ブランド「シュテーター地圖帳」の系列に属すると言へる。

ゾルとベルグハウスはなぜ尖閣を日本の色で印刷したのか。早い例ではドイツのシーボルトが尖閣を日本に入れてゐる。シュテーター圖でも幕末の西暦千八百六十七年から一貫して尖閣の西側に國境線を引き、尖閣を沖繩に入れる通例だった。ただ、歴年のシュテーター版では、沖繩そのものをチャイナに入れてしまふ場合があるが、その場合も尖閣は常に八重山とともにある。後にゾル・ベルグハウスの西暦千八百八十八年版でも八重山と尖閣を丸ごと臺灣側に入れてゐる。そのやうな誤解があつても、尖閣だけが八重山を離れて臺灣側

1884年『Sohr-Berghaus Hand-Atlas』  
（ゾール・ベルグハウス地圖帳）より、「China und Japan」。  
カール・フレミング刊、davidrumsey.com、11653-089



得能通昭『通昭録』卷五十一「越氏隨筆」卷三、第十二葉、此彝邪久國人と邪久國の個所。  
黎明館本、鹿兒島縣立圖書館K08ト51。



## 十、沖繩・屋久

『純心人文研究』第二十七號では『通昭録』活字本の夷邪久を論じた。今その原本を撮影し得たので掲載する。

明國の「續 弘簡録」卷四十二「琉球傳」では、夷邪久を「彝邪久」に作る。彝と夷とは同音のみならず同義通用なので、夷を單なる字音とせず、字義を意識して「邪久國のえびす」と解したのかも知れない。このたび鹿兒島で閲覧した『通昭録』では、『弘簡録』の彝邪久を釋して曰く、

「この文、『通典』等の本書より引用。邪久國は、今の薩州の管内に、やく鳥あり、即ちこれなり。」

と。これは筆者と同じく邪久國と看做してゐる。唐の『通典』卷百八十六「流求」條の北宋本（書陵部藏第四十一冊）では夷邪久に作るので、『通昭録』はわざわざ『弘簡録』獨自の彝邪久にもとづいたと分かる。

奄美博物館の高梨修館長らの研究によれば、飛鳥時代前半から奄美北部で大量のやく貝（夜光貝）が出土し、螺鈿製造が始まったことを示し、南島中で奄

美大島北部が特に多い（高梨修『ヤコウガイの考古學』など）。

あたかも同時代、掖玖と朝廷との間の遣使記録が『日本書紀』推古二十四年、二十八年、舒明元年、三年（各西暦六百十六年、六百二十年、六百二十九年、六百三十一年）と連続し、奄美のやく貝の急増と相關すると考へられてゐる。「隋書」の邪久もほぼ同時代である。

奈良時代の『唐大和上東征傳』と『續日本紀』によれば、天平勝寶五年（西暦七百五十三年）に遣唐使が復路「阿兒奈波」から益久（やく）鳥に着く。阿兒奈波は字音で「あじ（あに）なは」である。

明治の名著「大日本地名辭書續編」「沖繩」條には、これを阿鬼奈波の形似による誤寫だとしてゐる。南島には鬼界が島など鬼字が多く、徳川初期「琉球國・惡鬼納（おきな）嶋繪圖」などもあり、「阿鬼奈波」は信憑性がある。毛人・土蜘蛛・熊襲など蔑視の通例も各地にある。

これより先、飛鳥時代の『隋書』では天皇を「阿輩雞彌」と記載し、大君（おほきみ）に該当すること、木宮泰彦『日支交通史』第九十八頁で論じてゐる。輩が「ほ」となるのは、邪馬臺（やまと）、愛宕（おたぎ）、於母倍由（おほほゆ）など、等韻の蟹攝一等に屬して共通する。

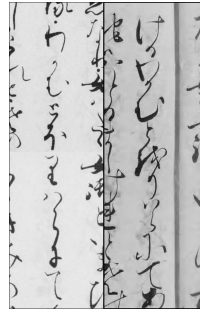
しかし阿が字訓でなく字音で「お」となるのは破格である。『隋書』に日本の「小徳阿輩臺」が隋使を出迎へたとあり、『日本書紀』の中で阿輩臺に該當し得る人名は安倍鳥（あべのとり・あべとり）か、大伴昨（おほとものくひ）である。阿輩雞彌と同基準で阿輩臺を「おほと」とすれば、おほとも（大伴）の末尾が脱落したと考へられる。

小徳は冠位十二階の第二階で、大伴昨は後に大徳まで至ること、『續日本紀』天平勝寶元年閏五月二十九日記述に見える。子の大伴馬飼も後に小徳の冠位を得たので、大伴昨は隋使を出迎へた時に小徳だったと考へられる。

『隋書』では日本の太子を「和歌彌多弗利」と記載するが、定説では「わかみとほり」と読み、多が「と」となる。『源氏物語』でも皇族を「わかむとほり」と呼んでゐる。



源氏の大島氏青表紙本では「わかむとをり」、尾州家河内本では「わかむとほり」に作るが、「わかむたふり」は見つからない。されば多・阿はともに等韻の果攝一等なので「と・お」で共通し、阿鬼奈波が「おきなは」となるのは確定的だらう。濱田敦『國語史の諸問題』第三編が参考になる。



右は新典社（昭和四十四年影印書陵部藏）

『青表紙本源氏物語』第二十一冊、

乙女第十六葉「わかむとをり」。

左は尾張徳川黎明會（昭和九年）『源氏物語

河内本』第四冊、

乙女第十一葉「わかむとほり」。

「おきなは」とは沖の（奥の）那波、即ち遠い那波と解し得る。古來沖繩の地理概念は内地が中心であり、中世『海東諸國紀』で早くも南が島尻（島尾）、北が國頭となつてゐる。口永良部と沖永良部も同概念である。

那覇は『海東諸國紀』で「那波」の皆波（みなと）となつてゐる。製鹽で著名な舊赤穂郡の那波（なば）も深い港であり、萬葉集に曰く、

「繩の浦に、鹽焼く煙、夕されば、行き過ぎかねて、山にたなびく」

と。柳田國男、島袋源七ら近代の大家はこの那波（繩）を沖繩に關聯づけてゐる。近い那波が赤穂で、遠い那波が沖繩といふことになる。

後に江戸に參勤した琉球使は、船で奈波津すなはち赤穂郡の那波に入港する場合があつた。薩藩『舊記雜錄・追録』卷四十九、正徳四年十月二十五日の條に見える。飛鳥奈良時代に參朝した南島人も、この萬葉の故地の沿岸を通航した筈である。

江戸時代の『琉球國舊記』卷一及び『遣老説傳』卷一では、那覇はもとの奈波から改められたとしてゐる。チャイナ近世字音では波（等韻一等）がP Oに變化し、覇（等韻二等）は元通りP Aと讀むので、鄙見ではチャイナ貿易の都合で波から覇に入れ替へて、なば（なば）の原音を保つたのであらう。

徳之島南岸の面繩（おもなは）港は、繩文後期の貝塚群に始まり、按司と具足城（ぐすく）の時代を経て、江戸時代の面南和（おもなわ）間切まで續いた町であり、近隣に龜焼陶器の現存唯一の窯跡遺構群があるため、面繩は龜焼出荷の要津だったと推測されてゐる。主な研究として平成三十年新里亮人『琉球国成立前夜の考古学』（同成社）がある。

龜焼は平安後期から鎌倉末まで一時代を劃するほど大いに流通したが、果たして奈良時代に面繩といふ地名が存在したか、且つ阿兒奈波と併稱される要地であつたか、分からない。ただ赤穂の那波に對する外側即ち表（おもて）の那波として面繩を擬し、更に遠い奥の那波として沖繩を擬するならば、極めて理解し易い。

## 十一、最初の尖閣パイロット

平成二十六年チャイナ海軍出版社刊『琉球文獻史料彙編』は、海軍として琉球を支配した史料集を意圖するかのやうだが、實際は琉球が未知の土地だったと示す史料ばかりである。

所收の西暦十五世紀後半の福州人黃澤作「通事梁應の琉球に還るを送るの序」は、久米村三十六姓唐人梁應の祖父が福建省長樂縣の海濱に居住して利涉を生業とした閩歴を述べる。黃澤『旂山翁文集』卷三下、「送通事梁應奉使還琉球序」、福建省圖書館藏寫本、平成二十六年、『琉球文獻史料彙編』明代卷に收める。和訓は以下の通り。

「（上略）其の上世に諱某なるもの有り、海濱に居し、測候を善くして利涉の術を兼ね。皇明、命を受け、天下、仁に歸するに、この國乃ち閩海の外に在り、風帆の便、七晝夜を歴て至るべし。上に三山あり、極めて其れ廣遠なり。俗、諸蕃にくらべて馴となす。洪武の初め、はじめて正朔を奉じて藩を稱す。某、航海の通道をなして以て入貢す。朝廷これを嘉みし、錫ふに王爵を以てして其の山川を望祀す。（下略）」

と。これによれば洪武開國の時、福建から琉球三山まで遠く七晝夜の航程であった。梁應の祖父は琉球から明國へ最初の朝貢の際に航海通導即ちパイロットをつとめた。そして洪武帝は琉球王を冊封した。

史實は洪武元年に洪武帝は開國を諸外國に宣布しながら、海路不案内の琉球には遅れて洪武五年（西暦千三百七十二年）にやっと欽命使楊載を派し、復路は琉球の貢使とともに福建に歸る。琉球王を冊封したのはその後である。

欽命使楊載の琉球渡航こそ洪武開國の大事績であるが、黃澤は梁應の祖父が楊載を導引したと書かないので、復路の琉球使の朝貢だけ導引したと分かる。琉球から福建に到着する船は、海岸の複雑な岩礁が危険のため地元のパイロットを必要とする。

後の年代にも琉球からの復路で福建人が導航した記録は間々あり、拙著『尖閣反駁マニュアル』でも論及した。しかし往路では尖閣海域を導航した記録が一つも無いどころか、通常は福建沿岸の馬祖列島から早くも琉球人が導航を開始する。

復路だけ福建人が導航する慣例が、最初の洪武五年から既に始まっていたことが黄澤の文から分かる。復路は大陸棚を北寄りに横断し、大陸のどこかに着岸すれば良く、南の尖閣を通らない。往路の尖閣海域では福建人以外の誰かが元から七晝夜を案内してゐたことになる。それは琉球人に外ならない。

これを記録した那覇久米村唐人梁應の年譜を今列すること左の通り。

西暦千四百六十三年秋、福建に渡航す。

西暦千四百六十四年春、北京に朝貢す。景泰帝崩御に遭遇し、明國に存留す。

西暦千四百六十五年春、北京に朝貢す。

同年夏、琉球に歸國す。

同年秋、再度福建へ渡航す。

西暦千四百六十六年春、北京に朝貢す。

同年夏、福州黃澤これを送別す。琉球に歸國す。

以上、黃澤「聖母天妃靈應序」及び『那覇市史』所収「吳江梁氏家譜」にもと

づく。

後の時代には三十六姓久米村唐人が尖閣を導引するやうになったため、最初の西暦千三百七十二年に琉球本土人が尖閣航路を教へたのか、それとも福建人が尖閣知識を久米村に持ち込んだのか、近年の争点であった。福建人が持ち込んだならば、なぜ後の時代に福建人は自ら尖閣を導引しなくなったのか分らない。しかし黄澤「梁應を送るの序」にもとづけば、地元琉球人が最初に三十六姓に教へたのである。

徳川家康は開幕の初め、朝貢貿易の自由化と擴大を琉球王尚寧に求めた。よって西暦千六百七年、尚寧は北京に問ひ合はせ、久米村唐人阮國及び毛國鼎を明國が公認するやう求め、さらに増員するやう願ひ出て、貿易擴大を目論んだ。冊封使夏子陽は前年琉球に渡航して歸國したばかりであったが、尚寧の求めを謝絶し、回答の中で洪武初年に言及して曰く、

「入貢航海、風濤測るべからず、かの三十六姓は、よく操舟を習知し、以て導引をなす。」

と。『歴代寶案』第一集、十三の七に見える。琉球からの入貢を導引したのが最初だとしてをり、梁應と同じく榮光の洪武勅使を尖閣で導引しなかつた意である。これは久米村側の歴代共通認識にもとづいてゐる。

上述の黄澤の梁應を送る序によれば、三山時代に福建琉球間は風帆七晝夜の便であり、季節の便船がすでに存在したやうである。黄澤が朝貢開始を述べる前に七晝夜及び三山廣遠の語を先に置く所以は、洪武帝が楊載派遣前に琉球を「阻山越海」（島に阻まれ海を越える）、「遠處海外」（遠く海外に在り）と形容した勅諭にもとづくであらう。しかしその形容を承襲せず具體的に七晝夜とした所以は、實情として久しく前から航路が通じてゐたのだらう。

風帆を「便」と呼んだのは必ずしも定期航路でないとしても、通常は既知の往來航路を前提とする。航路が無いならば風帆の阻と呼ばねばならない。航路が通じてゐながら洪武帝の遣使が遅れた原因は、福建人の船でなく琉球人の船だったがゆゑに、福建人は航路の詳細を速やかに得られなかつたのだらう。後

述する琉球側の秘密主義が洪武以前から既に始まってゐた可能性もある。そして他の關聯諸史料にもとづいても、洪武の初めに福建人は琉球沖繩を知らなかったことは以下に論じよう。

## 十二、白磁循環航路

平安時代から鎌倉前半まで、多くの唐船が博多に來航交易し、その遺物として薩摩塔、礎石（いかりいし）、磁器などが博多から奄美沖繩へ南下する流通の方向を示してゐる。しかし福建から琉球弧に沿って北上した方向性は見られない。關聯論文は多いが、例へば以下の二篇を参照できる。柳原敏昭「中世初期日本国周縁部における交流の諸相」、平成二十九年『専修大学社会知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報』第三號所收。高津孝等共著「南西諸島現存礎石の産地に関する一考察」、平成二十二年『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第七十二號所收。

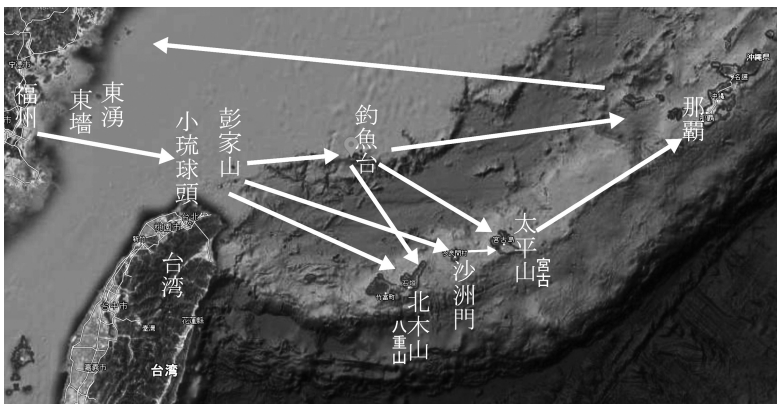
ところが元寇前後から南北朝の間、博多から九州西岸を南下する遺物は急減し、轉じて八重山から琉球弧まで、福建製の日用白磁が流通する。特徴は前代の博多と異なるため、今歸仁式、ピロースク式といふ特有の分類が施されてゐる。ピロースクとは石垣島の石垣中學校の北側のピロースク遺跡であり、昭和の末から出土した白磁が考古學で注目されてゐる。

この種の福建粗製白磁は琉球弧の生活雜貨として消費され、博多方面へ大量轉賣されなかつたため、博多と琉球とで異種の白磁に分かれてゐる。代表的研究は、平成三十年新里亮人『琉球國成立前夜の考古學』（同成社）などがある。琉球弧で白磁を自家消費するには自家の財力を要するので、按司などの豪族はすでに夜久貝や龜焼陶器などの販賣で富を蓄へてゐた筈である。

この時期の福建白磁を琉球奄美に運んだのは福建船か、琉球船か。乃至パイロットは琉球人か福建人か。考古學からは確定的見解が出ないが、福建側では琉球を渺茫不可知とする史料ばかり一色であり、福建人が主體的に白磁を琉球

まで運んでゐた可能性は全く無い。

福建白磁は沖繩本島の出土を主としつつ、モンゴル元國時代には八重山宮古の出土数も多く、しかし明國初期のピロースク第三期に至って沖繩島だけ急増し、逆に八重山宮古は減少に轉じる。つまり八重山宮古の白磁は元國から復路沖繩島を経て西に運んだのでなく、復路八重山宮古に直航して輸入し、明國時代は管理貿易により八重山宮古の道を閉ざしたと考へられる。



『指南廣義』  
西曆十四世紀  
循環貿易路

元國時代と一致するのは名護親方程順則『指南廣義』（西暦千七百八年）に、福州から定番の那覇復路だけでなく、北木山（八重山）と太平山（宮古）への復路を記載してゐる。八重山復路は、

福州―東壩（馬祖列島）―小琉球頭（臺灣島最北界）―北木山。  
となつてゐて、宮古復路は、

福州―東壩（馬祖列島）―彭家山（臺灣北方諸島）―釣魚臺―太平山。  
とあり、さらに福州から兩復路並記で、

第一路、釣魚臺―北木山尾（平久保崎か）。  
第二路、小琉球頭―沙洲門（多良間か）―太平山―那覇。

となつてゐる。沙洲門は多良間島の北側の白砂長濱中央の集落所在地、前泊港であらう。

逆に八重山宮古から福建への直航往路は記載されない。疑ふらく福建からの復路、八重山で積荷の白磁を半ば卸した後、宮古を経て那覇に至り、別の貨物を積んで再度福建に直航する循環便だったのであらう。上述の明國初期以前の七晝夜の琉球航路こそまさに琉球人の白磁の道であらう。

このうち福州―北木山航路だけは福建の航路書『順風相送』も載せてゐるが、全循環路を載せない。琉球の航路書から北木山だけを摘録したのであらう。しかし『順風相送』はそのまま死蔵され、オックスフォードで発見された。今のチャイナでは『順風相送』が西暦千四百三年に成つたとしてゐるが、實際は西暦千五百七十一年の長崎開港などが記載され、ピロースク白磁よりもずっと後の書である。

### 十三、福建人は鷄籠の硫黄を知らず

福建人が琉球航路を知らなかったことは、硫黄交易からも推測できる。硫黄は活火山で産し、日本では種子島の西の硫黄島、小笠原の硫黄島、沖永良部の隣の硫黄島が大手だが、臺灣島最北界の鷄籠の硫黄嶺山も大きい。

明國には活火山が無く、チベット、滿洲、臺灣の火山地帯を占領してゐなかつたため、明國の硫黄は外國に頼り、主な輸入元は日本、特に琉球からであつた。鷄籠から明國へ硫黄を直接輸入した記録は無い。明國人は鷄籠を知らなかつたからこそ遠く琉球から輸入したのである。

後に西暦千五百五十六年、『日本一鑑』「萬里の長歌」注では、沖永良部と鷄籠の硫黄を並論し、鷄籠の繪圖に硫黄山の噴煙を描いてゐる。それがチャイナ史料に出現する最古の鷄籠であり、明國人は琉球に行く途中ではじめて鷄籠といふ土地の存在を知つたのである。

上述の福州から琉球三山まで七晝夜の航路をかりに福建人が自力で渡航してゐたならば、途中で望見する噴煙の鷄籠で先住民と硫黄を交易しなかつたのはなぜか。實際は臺灣はチャイナ領土でなく、鷄籠すら知らないのだから、沖永良部の硫黄を買ひ取らざるを得なかつたのであらう。

西暦千三百五十年汪大淵『島夷誌略』および西暦千六百三年陳第『東番記』では、澎湖諸島の東の臺灣（今の臺南周邊）について、硫黄を産すると書いてゐる。硫黄は北部の鷄籠の産物でありながら、南部の臺南周邊の産物として記録するわけは、明國人自身が鷄籠に採掘に行かなかつたのであらう。

陳第『東番記』など諸史料には西暦千五百七十三年に廣東の大海賊リマホン（林阿鳳）が倭寇Sioco（庄公か）と聯合して臺南周邊を占領したことが記録される。臺南が兩勢力の會合地だつたとすれば、鷄籠はそこから遙かに日本側であるから、明國人が鷄籠を知らないのも宜なることであらう。されば洪武初の福州―鷄籠―尖閣―琉球三山の七晝夜は、琉球人の航路であつたと推定できる。

『元史』瑠求傳によれば、福建の書生呉志斗（呉誌斗）らが派遣されて瑠求（流求）を捜し求めたが、達した地が瑠求であるか否か不明に終つた。實際に達したのは臺灣西南部のやうではあるが、今日から言へば臺灣であれ沖繩であれ、求めて得られぬ未知の地だつたのである。

上述の洪武四年九月の詔で琉球を「阻山越海」とした知識は、八十年前に呉

志斗らが海路琉球に到達できなかった前歴にもとづく。呉志斗らが目指した琉球は沖繩でなく臺灣であり、彼らは沖繩の存在を知らない。

『元史』の「瑠」字は琉の別體であり、玉偏が示すのはそれまで沖繩側が夜久貝を福建に輸出してゐたことであらう。『純心人文研究』第二十七號に引いた胡翰が琉球の賄賂を警戒したのは、それ以前の夜久貝や白磁などの貿易が背景となつてゐただらう。琉球の夜久貝を知りながら琉球の所在を知らなかったとすれば、まさに琉球人が福建で貨物を交易し、福建人は琉球に渡航しなかつたがゆゑであらう。しかも福建人呉志斗は琉球を熟知するかの如くに自薦しながら結局琉球を知らなかつた。呉志斗にとつて琉球の夜久貝商人の來航は稀ではなく、すぐに琉球の地を得られると易視したのでらう。

洪武四年陰曆九月の詔から久しからぬ陰曆十月、使者楊載が日本人とともに南京に戻ると、わづか三ヶ月後の洪武五年（西曆千三百七十二年）陰曆正月に同じ楊載を琉球（沖繩）に派遣する。この速斷速決のわけは、日本内地で沖繩情報を得たか、乃至沖繩人に出逢つたのであらう。南京まで同行した日本使節の中に沖繩人も含まれてゐたかも知れない。琉球倭寇は他の倭寇と聯合して對馬まで遠征してゐたであらうから、太宰府で楊載に出逢ふとしても不思議は無い。呉志斗の琉球は臺灣であり、楊載の琉球は沖繩であるが、明國ではまだ兩者の區別がついてゐない。

『純心人文研究』第二十七號に引いた胡翰の序は『元史』成書から久しからずして成り、呉志斗（呉誌斗）が到達できなかった琉球に楊載が出使した壯舉を贊へる。胡翰もまた琉球が未知の地であつたことを基本としてをり、沖繩と臺灣とを區別できてゐない。

かくも未知だつた沖繩に渡航するには、情報を得ただけでなく琉球パイロットが水先案内する必要がある。かりに福建パイロットが琉球まで水先案内できるとも、もともと遣使困難の筈がないのである。

永樂元年（西曆千四百三年）の序を冠する『順風相送』は、卷下が西曆千五百七十三年以後に成り、澎湖以東の呂宋、琉球、日本航路を載せるが、早い時

期の卷上及び卷首は専らイスラム式航法の印度洋航路を主として、琉球航路を載せない。これもまた福建人が早い時期に琉球航路情報を持たなかつたことを示してをり、他史料の記述と合致する。

楊載が未知の琉球にわづか三か月の決定で派遣され、半年以内に渡航できた所以も、これにより思ひ半ばに過ぎる。既に福州から琉球まで毎夏の便船が存在したと考へるべきであり、楊載はその船に便乗した可能性が極めて高く、船中のパイロットは福建人ではなかつた。胡翰、楊載、黃澤、梁應及び『元史』、『順風相送』などの記録により、福建側が琉球航路を知らず、琉球側がパイロット乃至船隻を擁した可能性が益々高いのである。

#### 十四、琉球の秘密主義

西曆千五百七十九年に渡琉した謝杰『琉球録撮要補遺』の「用人」條には羅針盤の密室が記載され、西曆千六百六年の夏子陽『使琉球録』の「造船」條や西曆千六百二十九年茅瑞徵『皇明象胥錄』卷一「琉球」などにも類似的の密室の記述がある。パイロットするには海面を見渡す方が良いが、わざわざ密室にするのは航路を秘するためであらう。琉球ゆきの船以外で密室羅針盤の記述に出逢はないので、琉球人は特にチャイナ船中で許可されて航路を秘するために密室を設けてゐたと考へられる。密室では暗いため、白晝でも燈燭を點すと記述されてゐる。

後に西曆千六百八十三年、清國の冊封使汪楫『使琉球雜錄』卷一「使事」にも羅針盤の記述があり、密室とは述べないが、「晝夜、燭を燃やす」とするのは舊使録と全く同じなので、矢張り密室であらう。汪楫曰く、

「舵前有小艙、艙實以米、布針盤其中、晝夜然燭、夥長二人輪視之。」

と。小艙とは小型タンクであり、米は水の誤寫である。水を満たして方位磁針と方位盤を置くのであるから、所謂水羅盤であり、早羅盤よりも舊式で方角を確定しにくい。これは汪楫が目撃したのか、何らかの舊説を抄録したのか分か

らない。明國の李豫亨『推蓬寤語』卷七「訂疑篇」及び李豫亨『青島緒言』によれば嘉靖中に明國船は既に倭寇の早羅盤を導入してゐたとのことなので、百年後の汪楫の記述としてはあまりにも舊式に過ぎる。

後に西暦千七百五十六年、周煌「海上即事」では尖閣海域で琉球人が日本の羅針盤を用ゐるとして、「眞に乾坤有りて磨して停らず」と詠じる。これは旋轉するジンバル・コンパスであらう。伊能忠敬よりも早い時期で、日本のジンバル・コンパスとしては最古の記録と考へられるが、長崎の蘭人から輸入して盤面に漢字を附加したものかも知れない。

前述のゴアレス・レキオス史料に、琉球人は琉球の地理等を秘すると書かれてゐることは、前人の研究で屢次論及されてゐる。やや晩くは西暦千五百四十四年にポルトガル人フレイタスは暹羅で琉球人に出逢ひ、レキオスの出入國管理が極めて嚴格で、ほぼ鎖國状態であり、琉球人は琉球がどこにあるのかフレイタスに言はうとしなかつたといふ。岸野久『西歐人の日本発見』第二十六頁に見える。國の位置すらも秘したのは、船中で航路を秘したのと同じく、外敵防禦のためと、貿易の利潤獨占のためであらう。梁山泊が位置を秘したのと同じやうなことである。

汪楫『中山沿革志』自序では、琉球に到着後、三山分立について問うたが「みな知らずと謝し、世系沿革も亦た秘して以て告げず。蓋し國に厲禁あり、一切輕洩するを得ざるなり」とのことである。やむを得ず琉球宗廟の祭りの際に王名を竊寫し、さらに市中で「世續圖」を購入したといふ。

「世續圖」とは、羽地『中山世鑑』の巻首に載る王統譜である。堂々たる冊封大使が、琉球王府から王統圖すらもらはず、市中で買ひ求めねばならなかつた。しかもその王位は明國以來、チャイナにもらつた王位なのである。明國から清國へは、琉球王印の授受があつたので、繼承國である。ところが王名すら告知しないのだから、とても琉球がチャイナの屬國だと言へない。文部省の検定教科書で琉球を日清兩屬とするのは甚だしい誤りである。

されば福建人が尖閣航路を知らなかつた原因も解ける。琉球に渡航した三十

六姓だけが、琉球王に許されて尖閣航路を知ることができ、以後は尖閣海域のパイロットをした。その最古の記録が西暦千五百三十四年の陳侃『使琉球録』の尖閣航路だが、距離方位ともに不精確であり、尖閣渡航には不十分であつた。その後も福建側では一貫して琉球尖閣の秘密航路を詳しく知ることができなかった。

## 十五、寧波の亂から尖閣へ

寧波の亂は西暦千五百二十三年春夏の間に起こる。日本の勘合船が、明國當局の收賄により不公平な扱いを受けて、寧波港で争闘に及ぶ。戰國時代ゆゑ、勘合船は不平があれば倭寇に變身するのは、福建に於ける琉球人の亂闘と同じである。

このとき福州人謝賚（しゃふん）は北京で言官（議員）に在任してをり、海防に危機感を抱き、上疏して福州府の入り口の河道を批判したこと、『純心人文研究』第二十七號及び「漢文教材拾零和訓」（長崎純心大學「教職課程センター紀要」第五號）で論じた。有事の際に琉球船が攻め込んでくるといふ危機感である。故郷福州を熟知する謝賚としては、それまでの琉球人の亂闘の事例もあり、随時倭寇に轉じるだろうと警戒したのである。

明國朝廷は二年後の西暦千五百二十五年、寧波事件の調停を求める書翰を、琉球を通じて室町幕府に送つたこと、『皇明實録』嘉靖四年六月己亥に見える。琉球が日本本土と緊密な關係にあることを知つてゐたがゆゑである。謝賚が琉球を倭寇と同一視したのと同じ危機感である。

更に五年を経て嘉靖九年（西暦千五百三十年）陰曆三月、琉球使節蔡瀚（一に蔡瀚に作る）が日本經由で明國に朝貢し、尚清王の冊封を求めるとともに、足利義晴が勘合符を求めると文をもちた。明國朝廷は義晴の奏文に印信が無いため信ぜず、よつて尚清が琉球王位を篡奪したのではないかと疑つた。

『皇明實録』、『明史』日本傳、及び陳侃『使琉球録』に見える。

琉球は明國に對して王位の安定繼承を假裝するのが慣用手法であり、明國側も深く咎めなかったが、寧波の亂を承けて頓に咎めるに至ったのである。事件による危機意識の大きさとともに、ポルトガルが廣東方面で貿易を開始したため、明國の宦官の眼中で琉球の地位が低下したのが原因だらう。

明國朝廷は最終的に尚清を信任して冊封することとなり、西暦千五百三十四年に冊封使陳侃らが琉球に派遣された。陳侃は琉球行を詳細に記録し、歸國後に朝廷に報告書を提出した。それが後の歴代使琉球録の祖となり、釣魚嶼の最古の記載となったのである。陳侃が詳細に報告した目的は書かれてゐないが、上述の経過を参照すれば、一種の探偵的業務を兼ねてゐたと考へられる。

## 十六、西暦千五百十一年、琉球人の情報による臺灣島圖

東南アジアのアラブ人とポルトガル人の航海記中の琉球人につき、近年中島樂章氏が分かり易く論文に整理し、集成して『大航海時代の海域アジアと琉球、レキオスを求めて』（思文閣、令和二年）を刊行した。

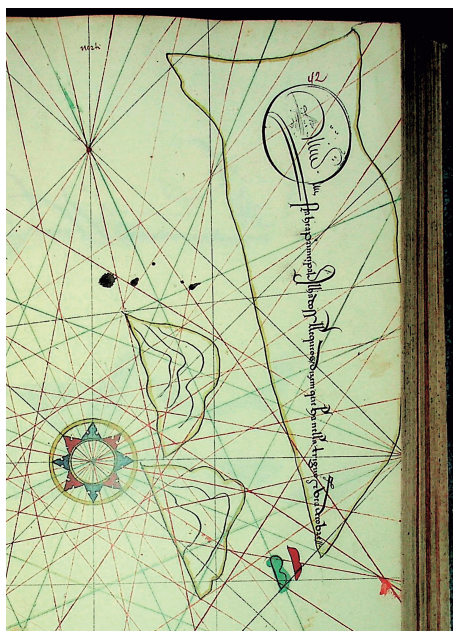
中島氏が特に焦點をあててゐるのがポルトガルの航海士ロドリゲスの地圖中のレキオスである。圖は西暦千五百十一年にポルトガルがマラッカを占領してから數年中にマラッカで成り、マレー族群の航海士の提供情報を取って依據とする。平成二十年にガルシア氏がこの地圖を影印刊行し、閲覽し易くなった。

ロドリゲス圖の第四十二葉には臺灣島が描かれ、島中にポルトガル語で「Esta he a principal Ilha dos Ilheques」（これは琉球の主島である）云々と注記され、沖繩の物産に言及がある。物産は沖繩だが、島の形状は一大島であり、ほぼ間違ひなく臺灣である。

西暦十七世紀前半まで、明國及びポルトガルでは臺灣島を一大島として認識することが無く、南北に分散した群島と誤解してゐた。それに較べてロドリゲス圖で一大島となつてゐるのは極めて早い。

後に西暦千五百九十七年にマニラで製作されたコ罗纳ル氏の臺灣島圖も一大

島となつてをり、鄙見では豊臣秀吉の使節がマニラにもたらした情報にもとづく。それが一大島状の最も早い年代だとこれまで考へられてゐたが、ロドリゲス圖は八十餘年早い。琉球人は東南アジアに進出してゐたので、道程中の臺灣島の情報を東南アジアにもたらすのは容易だった筈であり、ロドリゲス圖に採用されたのであらう。



José Manuel Garcia 編『O livro de Francisco Rodrigues : o primeiro atlas do mundo moderno』、folio 42、レキオス。 Editora da Universidade do Porto 刊、平成二十年。

ロドリゲスは終始臺灣に渡航したことは無く、マレー族群の航海士が臺灣に往つて貿易した記録も無い。中島氏はロドリゲス圖の情報源を密航唐人が提供したものと推測するが、明國側には一大島情報が全く存在しないので、中島氏が何故さう推測するのか不可解である。凡そ明國清國の持つ海外新情報は概して海外唐人（密航唐人を主とする）がもたらしたものであるから、明國側が認識した臺灣南北分島説も主に密航唐人がもたらしたものである。かりに密航唐人が西暦十六世紀初葉に既に一大島認識を得てゐれば、それは南北分島認識の

出現よりも早い。明國（及びポルトガル）は先に得た一大島認識から後に南北分島認識へ退歩し、そのまま明末に至るといふのが中島氏の豪膽なる推測である。筆者としては全く支持できない。

## 十七、律令に女系禁止の條文あり

メソポタミア以来、國家とは男性的權力であり、父系が斷絶した王朝は存在しても、母系だけで歴代つないだ王朝は存在しない。原始母系社會でも、代々つないで家譜を作るほどに母系を絶対視したわけではなく、人類が國家を形成して以後、家譜乃至歴史なるものは父系の興亡を記述したのであり、琉球でも家譜はそのまま歴史書である。日本の萬世一系は稀有であるが、世界史上の國家はみな萬世一系を前提として、ただ易姓革命で斷絶したに過ぎず、島國で閉鎖的な日本では斷絶しなかったのである。

奈良時代の養老律令の「繼嗣令」第四條に曰く、  
「凡そ王の親王を娶り、臣の五世王を娶るは、ゆるす。ただ五世王は親王を娶るを得ず。」

と。皇族女子は皇族に嫁ぐことと規定してゐる。「親王」とは娶る對象即ち内親王を指す。王とは皇親（皇族）である。王が五代を経れば皇籍を離脱して臣下となるので、皇族女子を娶ることができない。極めて例外的に皇族女子が臣下に嫁げば、和宮降嫁のやうに皇籍を離脱した。

「繼嗣令」第一條は女帝の子も皇親の内と規定するが、女帝の夫は第四條にもとづき皇室の内であるから、父系皇統に何らの毀損も無い。平安『令義解』もこの第一條に注するに第四條を以てする。女帝も皇族の内であるから、夫は皇族に限られ、男系は守られるといふのが律令の規定であった。今の皇室典範で天皇を男系と規定してゐるのは律令を守つてゐるに過ぎず、近代の新制度ではない。

外戚（女系）を以て皇統を觀れば、神武、綏靖、安寧の三代の皇后は大物主

の家系から出る。推古天皇「陰陽開和」の詔で三輪山の物主を祭つたわけは、佛教とともに神道を重んじる意圖である。また、外戚蘇我氏が女系で皇室を乗つ取る意圖は無く、皇室古來の最も權威ある外戚たる大物主を重んじて見せるためだったのでないか。

世には養子といふ制度があり、宦官は養子を取る。日本でも庶民や商家や亂世の武家では養子を取つたが、それは女系をつないだのでなく、血筋を絶対視しなかつたのである。最上位の皇室や將軍家ではやはり血筋が大切であり、そのため親藩や御三家を設け、男系から將軍を出した。遠縁の一橋家男系が最後の將軍慶喜である。皇室に外戚女系からの養子は馴染まない。

遣隋使の三年前、十七條憲法は佛法僧の三寶を「萬國の極宗」即ち至高の國際標準として崇敬せよと述べる。「萬國」を意識した聖德太子は、ユーラシア國際派の人物であつた。十七條憲法には儒教的な記述も多く見られるが、普遍的道德や國家秩序を述べるのみで、儒教の聖人とされる周の文王や孔子などを崇敬せよとの文言が無い。佛法僧との差は明らかである。古來の安定的社會の道德を漢文で記述すると儒教的に見えるに過ぎない。

十七條憲法には神道の祭祀の記述も無い。だからこそ小野妹子派遣の前に、垂仁天皇の故事にならひ、遠い祖先の神道に對しても怠らないと示すために、日本的な「陰陽開和」の詔が下されたのではないか。

もともと孔子の儒教でも易姓革命は中心思想でなく、ただ黄河文明の太古に夏・殷・周といふ王朝の易姓が繰り返されたため、現實にもとづき禪讓と呼んで理想化してゐるに過ぎない。

易姓革命が強調されるのは北宋の中華思想以後であり、その代表が朱熹である。朱熹らの思想の核心は中華思想および宇宙論であり、儒教の斷片的宇宙觀を利用して、古代中華にも偉大な宇宙論があつたのだといふ幻影を捏造するために、朱熹は膨大な注釋書を執筆した。

朱熹らが易姓革命を肯定したわけは、易姓の無い萬世一系に對抗するためである。韓愈の中華思想では印度に負けるものかと敵愾心を燃やし、佛教が悪因



となつて南北朝・隋・唐・遼・金の易姓が起こつたのだと認定する。一方で佛教の法統をまねて儒教の道統を捏造し、儒教こそ孔子以来の萬世一系だといふ精神勝利法を以て、道統こそが王朝の易姓革命を主導すべきだといふ理屈になつてゐる。

佛教の殺生戒の祖法とされる天武天皇の詔では、

「牛・馬・犬・猿・鶏の肉を食らふなかれ。以外は禁例に在らず。」

と述べる。馬・犬・猿は今も食の禁忌とされ、牛と鶏は今の日常食だが、豚だけは詔の禁例から外れてゐる。牛馬について魏志倭人傳では

「その地に牛・馬・虎・豹・羊・鶻（かささぎ）無し」

とされ、もともと國內に無い。牛馬は古代オリエント文明の周邊で家畜となり、卑彌呼以後にやつと日本に到達したため、「うま」は和語でなく、馬の漢字音が語源である。

日本古来の食肉は豚であり、ゐのこ、ゐのししと呼ばれた。「しし」は肉であり、天武の詔でも食用を禁止できなかった。今なほ東日本では豚肉食、西日本では牛肉食が多く、最高級和牛は近畿周邊の神戸（但馬）と松坂であり、古代の牛が都會の新文化だった痕跡が續いてゐる。

## 十八、『新撰姓氏録』と竹島

平安『新撰姓氏録』の千百八十二姓氏の神別・皇別・諸蕃三類の内わけは、皇別三百三十五氏、神別四百四氏、諸蕃三百二十六氏である。それぞれほぼ三分の二を占める。これは現代日本人の父系Y染色體の主要三種にあてはまる。

D1b（舊D2）及びC1a1、約四割・東日本縄文人、神別、大物主系。

O1b2（舊O2b）、約三割五分・西日本縄文人（本土彌生人）、皇別、神武天皇系。

O2（舊O3）、約二割・渡來系彌生人、諸蕃。

姓氏とは即ち父系であり、今のY染色體に相當する。『新撰姓氏録』は近畿一圓に限定されてゐるが、その大枠は全國の父系遺傳子の比率で證明され得る。皇室のみならず日本のくにかたち即ち國體が問はれるのが父系である。近代以前の所謂姓氏なるものは、言ふまでもなく父系であり、父系は現代では生物のY染色體で繋がつてゐることが分かつたのである。

諸蕃の内わけは、漢と百濟が大多数を占めて、高麗新羅任那は少數である。よつて多くの漢人は高麗經由でなく、長江文明から五島や百濟を経て渡來した可能性が高い。任那が少ない所以は、疑ふらく任那の日本人は諸蕃（外國人）と看做されなかつたのではないか。

朝鮮半島東岸にはかなり早くから縄文人が渡航してゐたことがY染色體や青谷遺骨から分かるが、それも『新撰姓氏録』で日本人と看做され、新羅と高麗が少ないといふ結果に繋がつたのではないか。皇別の酒部氏（古事記で百濟とする）、田邊氏、吉田氏、新良貴氏、神別の韓國氏・物部韓國氏・秦氏などがこれである。先行研究ではこれらの氏について、渡來人が日本人を詐稱したのだとする。例へば菅澤庸子「新撰姓氏録における姓意識と渡來系氏族」（平成十三年、京都女子大学史学研究室『史窗』第五十八號）に見える。しかしY染色體から見れば確かに日本人が朝鮮半島まで往來してゐたので、詐稱説は修正を要する。

西日本縄文Y染色體が任那・新羅・高句麗東部に分布し、逆に『新撰姓氏録』では任那・新羅・高句麗が少ないといふ相補を成してゐる。この現象の解としては、任那新羅高句麗に渡航した西日本縄文人が、『新撰姓氏録』で任那新羅高句麗の諸蕃に分類されなかつたのである。そこにO1b2の西日本人を日本民族として、O2の渡來人を外國人とする民族概念が見られる。

換言すれば、早期に朝鮮半島の東部南部に渡航した新モンゴロイド即ちO1b2西日本縄文人は、『新撰姓氏録』でも日本人として扱はれ、一方で晩期に渡來した新モンゴロイドO2は諸蕃とされたため、晩期の百濟からの諸蕃が多

いのであらう。百濟人は古墳時代から南朝文化を日本にもたらした。

皇別の新良貴氏は『新撰姓氏録』で新羅王の祖とされ、また『三國史記』で新羅第四代王・脱解尼師今は倭人から新羅王となり、新羅開國の元勳瓠公も倭人とされる。ここにも西日本縄文人が朝鮮半島東南部を勢力下に入れてゐたことが示されてゐる。

『新撰姓氏録』は神武天皇以前の日本を「神別」としてまこと肯定し、縄文文明の存在を史上初めて神武皇統から分けたと言へる。『新撰姓氏録』の序文で神別が皇別の前に置かれてゐるのも神別が古いがゆゑである。研究によれば草稿では慣例にもとづき上巻が神別、中巻が皇別であつたが、定稿で倒置せられたといふ。それが序文に痕跡を留めたのである。

明確な竹島最古の史料は元和四年（西暦千六百十八年）、幕府初期の渡航許可である。一方で二千年前、鳥取の青谷遺跡の縄文男子のもとに彌生女子が集積的に渡來してゐたことが人類考古學で分かつた。篠田謙一、神澤秀明「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第二百十九號、令和二年三月）に見える。縄文父系、渡來母系といふ傾向は全国的であり、それが青谷で突出してゐる。縄文人による鬱陵島、竹島、隠岐、鳥取といふ一直線航路が浮かび上がる。

奈良平安時代、遣唐使ならぬ遣渤海使の復路で想定されるのが、渤海國西南部・朝鮮半島最北部から出航し、鬱陵島、竹島、隠岐を経て出雲に至る航路である。正史『續日本紀』によれば天平寶字七年（西暦七百六十二年）陰曆十月、遣渤海使が歸國し、隠岐に漂着する。漂着とはいへ、もともと鬱陵島および竹島を経由する航路だったかも知れない。

そして延暦十八年（西暦七百九十九年）陰曆五月の正史『日本後紀』巻八によれば、前年に遣渤海使が歸國した際、やはり漂流して隠岐の西南部の智夫郡（今の島前地域）に漂着する。この時は渤海國側からの使節を伴つてゐた。

同記録によれば、この地にしばしば商賈が漂着し、靈驗あらたかな比奈麻治比賣（ひなまじひめ）の神が光を揚げて救ふとあり、今もそこに神社がある。

漁船でなく商船であるから、日常物資の運輸程度でなく、朝鮮・渤海まで往來して高麗貿易をしてゐた可能性が高い。

後に平安時代の渤海使は、隠岐と出雲に到着するのが定例航路の一つとなる。その最初の記録は日本船が伴つて來たことに始まるのであるから、基本的に日本人の海であり、日本海といふ名稱は歴史にふさはしい。

これら渤海出雲間の航行記録は、鬱陵島、竹島、隠岐を経由したと想定するのが常識的解釋であり、航路史の諸研究でもみな竹島經由だと推測して誰も疑はず、ほぼ定説である。しかし竹島領有の議論の中では奈良時代航路が全く取り上げられない。法的領土に固執して貴重な歴史を閉却してしまふのは惜しい。悠久の日本史の中の竹島を意識すべきである。

渤海使が日本に來航する航路は三路あり、北回り航路、日本海横斷航路、朝鮮半島横斷航路である。日本海横斷航路は日本側が切り拓き、後に渤海使がこれを利用するようになったとされる。朝鮮半島に近い渤海南京南海府から出て、日本の山陰北陸に着岸する。古畑徹氏は、この日本海横斷航路の經由地として、鬱陵島、竹島、隠岐を想定してゐる。

竹島の歴史を語る時、鬱陵島の和名「磯竹島」と古代神話とのつながりはしばしば論及される。『日本書紀』によれば、素戔嗚が子の五十猛とともに新羅にゆき、歸つて來たのが出雲である。そして五十猛命は各地に木々を植ゑた。

出雲の西部には、五十猛のみことを祭る「五十猛神社」（島根縣太田市）があり、すぐ西に歩いて半時間ほどのところに韓神（からかみ）新羅神社がある。歴史學的根拠とはならないが、精神論としては遣傳子學的西日本縄文人の代表たる素戔嗚が朝鮮半島に渡つて歸つたといふことにならう。

江戸時代の青地禮幹『可觀小説』巻九「日本の竹島、朝鮮へ奪はるる事」の條では、竹島即ち鬱陵島を朝鮮に取られたのは口惜しいこととする。領土問題は鬱陵島だったのである。任那復興といふのも、もともと任那が日本であつたといふ前提である。古代以來、日本は次第に半島から追ひ出されて、鬱陵島まで取られてしまった、對馬は取られてなるものか、といふのが歴史的大勢であ

らう。

## 十九、香港はもともと清国外だった

香港島がもともと清國領土だったといふのは誤りで、歴史上最初の統治者はイギリスであり、そこから海洋的自由文明に浴して百八十年を越えた。香港だけでなく廣東など大陸東南部は、西暦八世紀に海のシルクロードのイスラム商人が先進的航海術で唐國に押し寄せてから以後、千三百年の歴史がある。

イスラムから順にポルトガル、オランダ、フランス、イギリスが押し寄せて、結果として眞珠のやうな香港が生まれ、この數年來の衝突が起こつてゐる。イスラム來航以前に遇れば、百越と呼ばれた長江文明の東南諸民族がチャイナに軍事占領されてから二千年間の歴史がある。

そして今日を迎へた香港だが、香港が敗北すれば海のシルクロードの多元的文明が敗北し、大陸ファシズムが勝利する。イギリスが香港をチャイナに移譲した時點で文明側の敗色は濃厚だった。清國領土でなかった香港島を、わざわざ「返還」してしまつたのは、諸因あるが歴史意識不足が一因である。

香港、臺灣、尖閣は、大陸ファシズム封じ込めラインの要衝だが、ファシズムが香港で突破口を開けるならば世界史的な大事件となる。日米英政府が本氣にならぬ限り、五十年後の世界はファシズムの世紀となる。香港の若者は北京語で教育され、惜しむべき文化は消失する。

香港は、ファシズムと文明とが對決する最要衝であり、ここで勝利する者が西暦二十一世紀を制するのであり、香港の若者に同情するか否かの問題ではない。しかし文明の側はいつも弱腰なので、チャーチルほどの暴れん坊が一大決心して退治せねば勝てない。

香港島はアヘン戦争まで清國領土ではなく、香港の北の新安縣の官製地誌では九龍半島までを境界線としてをり、香港島の存在すら官製地誌にはほとんど記載されなかった。近代以前の香港史の大部分は九龍史で代替され、誤魔化され

てゐる。

唯一、明國の廣東人、郭棐が個人編纂した『粵大記』に、稍箕灣、赤柱、大潭、黃泥涌などの現存地名が載つてゐる。香港といふ島も載つてゐるが、地名の位置關係からみて現在の西南側の離島、鴨脷洲に相當するのが定説である。

邊鄙の島に香といふのは、印度方面の香料の貿易地だったからだとされる。鴨脷洲に向かひ合ふ香港仔・石排灣といふ入江は、西暦十九世紀まで領土外の貿易據點となつてゐた。香港仔とともに、稍箕灣の東隣の柴灣や、島の東南側の赤柱などは、近代では蛋民の村落として知られる。

近代香港は九龍半島の突端に向かふピクトリア港を中心に、北のチャイナとの貿易地として發展した。ところが『粵大記』の古地名は、どれも香港島の南側や山中や東端の邊鄙の土地で、イギリス時代初期では海上でしか往來できない場所であつた。

稍箕（筲箕）はチャイナ南方の語彙で、曲げわっぱのかごを指し、筲箕灣は香港海峡の東部に位置する。もともと長江以南はチャイナではなく、始皇帝の前後からチャイナに占領されていつたので、南方方言の多くは各民族語を漢字で記したと考へられる。要するに香港島はチャイナの島でなく蛋民の島として、チャイナの反對側の南部から發展した歴史を『粵大記』の一幅の地圖が物語つてゐる。

香港島は清國公式領土の外側だったが、それでも實効統治したのか否か。アヘン戦争以前は香港の西の大嶼山に砲臺が設置されてゐたが、香港島（紅香爐）では海面巡視を「水汛」と呼び、兵員の上陸記録すら無い。

西暦千八百二十二年の『廣東通志』第百七十五卷、第二十六葉に「紅香爐水汛」が見えて、巡洋すると注する。「汛」は季節ごとの海上巡視定點を指し、上陸するとは限らない。わざわざ「水汛」と呼ぶのは上陸しない巡視點であらう。同卷では珠江デルタの河口に碧頭・茅洲といふ水汛があり、それぞれ巡視兵三名が規定されてゐる。香港島の水域もその程度の巡視點であり、「巡洋」は海面上で巡視するといふ意に外ならない。

ほぼ同時期の『新安縣志』（西暦千八百十九年）では赤柱山（香港島）を兵が「防守」してゐると書いてある。現チャイナでは「防守する基地だ」と擴大解釋してゐるが、『廣東通志』とならべて見れば、防守は海面巡視に過ぎない。しかも赤柱山の前後文では、大鵬山・沱滯山などの大基地に兵ありと注記しない。つまり末端のはづれだからこそ逆に兵の巡視を書いたのである。

平成三十年、香港海事博物館では西暦千八百三十九年以前とする「廣東沿海統屬圖」と、西暦千八百六十年以前とする「廣東水師營官兵駐防全圖」を公開した。ともに香港島内に基地がある。前者を西暦千八百三十九年とするのはアヘン戦争後の占領が反映されてゐないためで、後者は千八百六十年に九龍半島南部を割譲したことを反映せず、しかしビクトリア港に既に「洋人の砲臺」が描かれてゐるがゆゑだらう。

実際には兩國ともにアヘン戦争直後と考へられる。香港島はもともと領土外であるから、清國にとつては割譲した領土ではなく、ただ域外の軍事的要衝だから、イギリスに對抗して香港島内に清國基地を作つたのだらう。だから前者では大嶼山の大基地は小さく描かれ、香港島の小基地は大きく描かれてゐる。いま轉載できないのが残念である。

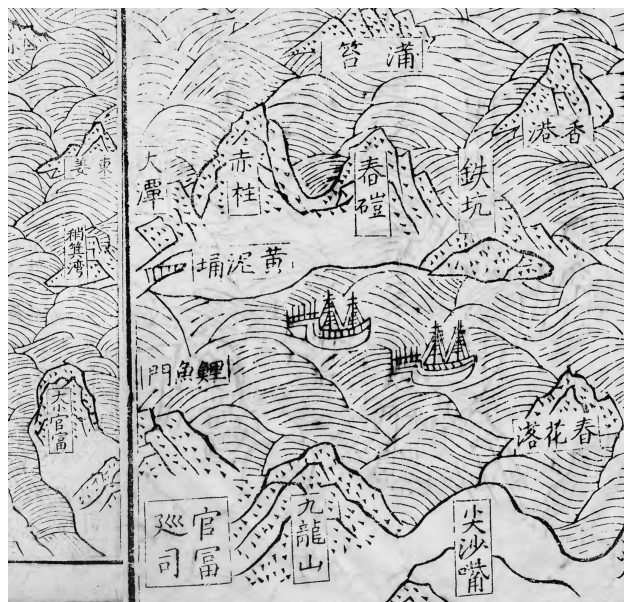
香港島が領土線外だったのは例外ではなく、沿海部の一般原則であつた。黄河文明の大陸政權にとつて、東南の江蘇・浙江・福建・廣東は占領地であり、そこからさらに外の海洋は暗黒と邪惡に満ちてゐて、チャイナは海のシルクロード勢力に對抗するだけの技術力・兵力・情報力を持つてゐなかつた。

大陸海岸線はチャイナの絶對守備ラインであり、そこから少し海に出た沿岸島嶼こそ、大陸チャイナが海洋勢力とせめぎあふ最前線として、前期倭寇時代に歴史に登場する。後に來航初期のポルトガルは、鎖國中の明國に上陸できず、廣東の首府へ通じる珠江の外海の西側沿岸で、チャイナ領土外の上川島を據點として、福建浙江の沿岸島嶼に進出する。

かの聖ザビエルは、日本だけでなくチャイナにも上陸布教を熱望しつつ上川島で亡くなつた。かつて私は邊鄙の上川島の悲劇を想像してゐたが、少しく學

べば上川島は澳門占領以前にポルトガル船の航路ハブとして築えてゐたからこそ、ザビエルが逗留したのである。

郭棻『粵大記』卷末地圖から九龍部分。國立公文書館29210083



以上全文は令和二年、三年「八重山日報」談話連載「小チャイナと大世界」に始出し、大幅に修訂した。

(終)

(二〇二二年十月六日受理)